日本醫史學雜誌

第15巻　第4号

昭和44年12月31日発行

原　著

福沢諭吉の「牛痘再種之説」……大滝　紀雄…(1)

利光仙庵著「引痘夜話」について……川島　恂二…(6)

生きた歴史——内分泌学者、シーハン博士小伝……中江　孝治…(15)

適塾門下生坪井信立に就て……青木　一郎…(19)

嶺春泰伝追加……緒方　富雄…(24)

鷗外の史伝「渋江抽斉」の校勘記（三）……松木　明…(28)

Detachments to the Isle of Yezo and Scurvy

……Akitomo Matsuki…(i)

例会記事……(31)

雑　報……(35)

通巻第1378号

日本医史学会

東京都文京区本郷2～1～1
順天堂大学医学部医史学教授室内
振替口座・東京15250番

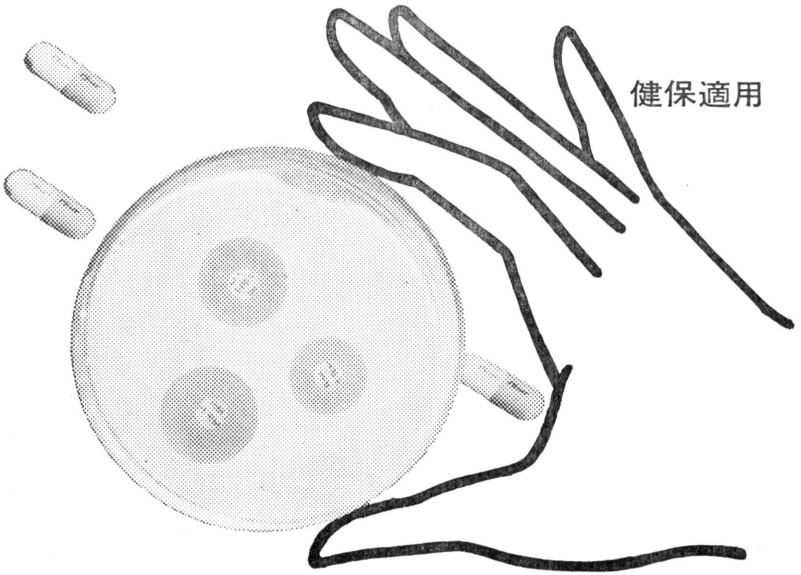
1日600mgの時代です！

従来のテトラサイクリンに広さと深みが加わりました

広範囲抗生物質　Methacycline hydrochloride

ロンドマイシン カプセル

- 呼吸器感染症，消化器感染症などに優れた治療効果が得られる
- 1日600mg2分服で有効，吸収が速かで高血中濃度が長時間持続する
- 胃腸障害が少なく，光線過敏症も報告されていない
- 健保薬価：1カプセル　￥57.00



健保適用

＊科学は世界の向上のために―医学は人間の幸せのために

Pfizer 台糖ファイザー株式会社

東京都中央区日本橋通2の2　TEL（272）6661

RM－6

福沢諭吉の「牛痘再種之説」

Revaccination Theory against Smallpox Translated by Yukichi Fukuzawa

大滝紀雄
Toshio Otaki

一、はじめに

私は横浜市立大学医学部図書館の古書中に、福沢諭吉翻訳「牛痘再種之説」を発見したのでここに報告する。同館には石崎及び高田蔵書印のある医書が多い。表題のものも写本ではあるが、両蔵書印が押されている。これは順天堂に関係のあった石崎濤平氏の（おそらく石崎氏自身が写した）蔵書が高田氏に譲渡され、その一族から昭和二十三年十二月、開校後間もない横浜市立大学医学部（当時の横浜医専）に寄贈されたものであろう。

本書は明治初年のものと推定され、

一、製煉薬経験
二、牛痘再種之説
三、順天堂製薬経験
四、銃瘡経験

の四項目から成っている。一、三、は順天堂製薬関係であり、四は、「左ノ病症奥羽朝敵ノ節、戦争ニテ銃瘡経験書　進兄（佐藤進）記之」と書かれている。

二、その全文

全文を次に掲げる。句読点、濁点、カッコ内は筆者が加筆したものである。

牛痘再種之説　　福沢諭吉訳

種痘ノ始メテ行ハレシ時ハ、之ヲ称誉スル者ノ説ニ、一度

ビ種痘ヲ行ヘバ生涯天然痘ニ罹ルノ患ナシトテ、此説ヲ信ズル者多カリシガ、爾後経験ニ拠テ之ヲ観レバ必ズシモ然ラズ。牛痘ヲ種ヘテ十分ニ効ヲ奏シタル者モ時日ヲ経ルニ従テ再（ビ）天然痘ニ罹ルコトアリ。固ヨリ再患ノ時ハ痘ノ趣ヲ変ジ経過速カニシテ病症軽キヲ常トスト雖モ、或ハ之ニ由テ斃ルル者ナキニ非ズ。故ニ種痘ヲ以テ天然痘ヲ防グベキ功（効）力ノ軽重ヲ論ズルハ、大緊要ナリ。再患ノ患者ヲ経験スルニ、種痘ノ后久シク年ヲ経タル者多シ。之ニ由テ考フレバ種痘ノ功力ハ時ヲ経ルニ従テ消滅スルニ似タリ。然レドモ其ノ時限ノ長短ハ人々ノ天資ニ存スレバ得テ定ム可キニ非ズ。天然痘終リシ者ト雖モ或ハ再感スル者アリ。種痘ノ功力モ之ニ異ナルコトナシ。一回ノ功力生涯ヲ保ツ者アリ。或ハ再感ニ殛ナク（斃レズ）シテ第三感ニ斃ルル者アリ。一般ノ説ニ防痘ノ功力ヲ消滅スル期ハ男女嫁娶年純（頃）ニ及ビ、体格ヲ一変スル時ニ在リト云フ。右ノ故ヲ以テ牛痘ノ功力ヲ存スルト否トヲ試ムル術ナリ。一回之ヲ試ミテ功ナキ者ハ尚註（注）意シテ二回ヲ試ムベシ。千八百四十八年普魯士ノ兵卒二万八千八百九十九人牛痘ヲ再種セントシ、其人々験（検）査セシニ皆ナ且ツテ種痘ヲ経タル者ナレドモ、其内六千三百七十三人ハ痘ノ痕跡既ニ消滅シテ分明ナラズ。此惣（総）人員ハ再種シ一万六千八百二十六人全ク水泡ヲ発シ、四千四百四人ハ泡ヲ発シテ全カラズ。七千七百五十三人ハ効ヲ見ズ。即チ又此ノ七千七百五十三人ハ再ビ試ミタルニ泡ヲ発スルモノ千五百七十九人ヲ見タリ。前年ヨリ普魯士ニテ再種ヲ試ミタル兵卒ノ内ニ、天然ノ風痘ヲ患ヒタル者ハ僅カニ一二人ニシテ真痘ヲ感ジタル者絶テナシ。然ルニ新募兵ノ未ダ再種セザル者、及ビ再種（シ）テ効験ナカリシ者ノ内ニハ、風痘ヲ感ジタル者七人アリシト云フ。抑種痘ノ功徳ヲ知ランニハ、病者死亡ノ数ヲ計（ラ）バ之ヲ比較（較）シテ其至大ナルヲ見ルベシ。英国ニ於テ千七百年代ノ（中）央ヨリ末ニ至ル迄病死千人ノ内ニ痘ニ死スルモノ九十六人ナリシ者、千八百年代ノ初ヨリ其（中）央ニ至リテハ、病死千人ノ内痘ニ死スル三十五人ノ割合ト為レリ。都（従）テ痘ニ罹リテ死スル者ノ数ハ其国ニ種痘ノ施行盛（ンナ）ルト否トニ由テ多寡アリ。千八百五十三年ノ頃「エワラント」及ビ「ウオール」ニ於テ痘ニ死スル者ト他ノ病ニ死スル者ト其数ヲ比較スルニ、二十一人九分ト千人トノ如シ。「ロンドン」ニ於テハ十九人ト千人トノ如シ。「アイルランド」ニ於テハ種痘ノ行ハルルコト盛ナラズシテ死者ノ割合四十九人ト

千人トノ如シ。其他欧羅巴ノ諸国ニテモ皆此ノ比較ニ従テ、種痘ノ盛ニ行ル処ハ痘ニ死スル者必ズ少シ。

明(治)三年午五月飜訳

三、内容について

本文の要旨は「種痘の効力は時日が経つにつれて消滅するらしい」という点にある。本文の翻訳はジェンナーにより種痘が実施されてから七十余年を経過しているが痘瘡死が全死亡例の二%もあった当時としては、此の説は新らしい考え方であったのだろう。百年後の今日種痘の有効期限は大体四年とされている点からみても、かなり正確な説であったといえる。ただ当時の牛痘ワクチンの製法が幼稚であったため、不良痘苗がかなりあったことが注目される。次の布告はその間の事情を物語っている。

明治十三年九月　内務省乙第三拾六号附録

種痘施術心得

第五　種痘ノ注意

第十四条　初種ノ不善感ハ痘苗ノ不良ナルカ或ハ其人一時ノ不感性ヲ有セルニ因ル者ナルカ故更ニ三四週ノ後善良ナル痘苗ヲ撰ヒテ再ヒ接種スヘシ

四、諭吉と医学

福沢諭吉が医学に深い関心をもち、多数の医学者と親交を結んでいた事実は彼の経歴を見れば一目瞭然である。一八五五年（安政二年）に大阪の緒方塾に入り、多数の医学生と交り、蘭書を翻訳し、二年後には塾長を勤めた。また一八七三年（明治六年）から一八八〇年（明治十三年）まで三田の慶応義塾の敷地内に慶応義塾医学所が建てられ、アメリカ式医学が行なわれた。これは福沢諭吉個人の出資で建てられ、校長は松山棟庵であった。慈恵医大の前身成医会の結成される直前であり、ドイツ医学一辺倒の中で、米英系の医学教育は特徴のあるものであった。

諭吉にはおびただしい数の思想、経済、学術、教育関係の文献があるにも拘らず、医学に関するものは通俗医学を除いて極めて少ない。それらを通読して感ずることは、自分は医者ではないから、医学に関してはその道の専門家に委せるという傍観者的態度を終始一貫して保持している。

福沢諭吉全集十巻（大正十五年版）同続編七巻（昭和八年版）、福沢諭吉選集（昭和二十六年版）、福沢諭吉教育関係文献索引（慶応義塾永沢邦男著昭和三十年版）等を参考にして医

学に関する文献を挙げてみると次のようになる。

生理、衛生に関するもの……九編
医事規則等に関するもの……五編
漢方医の批判……四編
売薬に関するもの……七編
遺伝に関するもの……三編
コレラに関するもの……四編
其他……十数編

其他の中には「大槻磐水先生五十回追遠の文」「杉田成卿先生の祭典に付」「蘭学事始再版の序」等が含まれている。

諭吉の医学関係文献の性格を総括的にいうならば、その殆ど全部は通俗医学ないし医史学的なものと判断される。

種痘に関するものでは「医術の新発明」[*1]などでわずかに言及されているものを除いては、「種痘の発明」[*2]が一編だけ見られる。これは一八九六年（明治二十九年）五月十四日に書かれたもので、丁度百年前の同月同日、ジェンナーが、牛痘を人体に試みた日であり、「ジェンナー先生の大功徳を紀念して報恩の誠意を表した」文章である。

五、翻訳の時期と出所

明治三年午は諭吉が三十七才であり、五月にかなり重症な腸チフスに罹っている。従って罹病直前の翻訳であろう。原書の書かれた年代は一八五三年から一八七〇年の間である事が分る。著書および著者名が記載されていないので、原典出所が判明しないのは遺憾である。

翻訳の内容には英国の地名が多く、また諭吉は二十六才を境として、蘭学より英学に重点を移しているところから、原著は英語であったと推測される。

六、結　語

未公開の福沢諭吉の医学的文献を紹介した。翻訳ではあるが、通俗的ないし教訓的でなく、学術的な点が特異であり、貴重な一文であると思われる。

内容は当時としては、新説であったのだろう。彼の啓蒙的な性格が、あえて本文の翻訳をさせたのではなかろうか。

＊1　福沢諭吉全集　続篇第三巻
＊2　福沢諭吉全集　正篇第十巻五七頁

本稿の内容は日本医史学会の七月例会で報告した

Summary

Lately I found, at the Library of the Medical Department in Yokohama City College, an unpublished essay of "Revaccination Theory against Smallpox„ translated by Yukichi Fukuzawa in May 1870.

According to it, in the early days of vaccination, people believed that once vaccinated, one would never suffer from smallpox. However after several experiences, it was ascertained that the preventive power of vaccination died away as the days passed by. In 1848 revaccination was given to 28,899 Prussian soldiers, all of whom had been once vaccinated. 16,826 among them were rendered immune, while 4,404 were only pustulated, and 7,753 were inefficacious. When those 7,753 were vaccinated for the third time, 1,579 became immune. It is also reported that the death rate from smallpox in some parts of London, Ireland, etc. was low because vaccination was often given there. In conclusion, the author says that vaccination is an excellent measure but it does not last to the end of one's life.

To our regret the original text is not found yet and its author's name is unknown.

Yukichi Fukuzawa was a great thinker and educator in Japan, who founded Keio University. With all his works, he wrote little about medicine, as he was not a doctor. The translation of "Revaccination Theory against Smallpox" may be a rare document.

利光仙庵著「引痘夜話」について

川島恂二

On Toshimitsu Senan's "Into Yawa" —Introduction to the Vaccination—

Junji Kawashima

本邦痘瘡史に関しては数限りのない研究がなされているが、私は今回、これら痘瘡史に加わる貴重な壱冊、題して「引痘夜話」（うえはうそう・よばなし）の小冊子を、古河市観音寺河口信広氏方に見出したので報告する。そもそも**河口家**は、解剖学者河口信任を出した土井侯御側医の家柄である。因みに河口家譜は次の様になる。

河口良庵＝房頼—房重——信任——信且—
（春益）（了閑）（了春）（閑春、子遠、道五、宏斉）（公誓）

—信順——信寛＝
（祐卿）（杏斉、枕河）
（陶斉）

—信久—久雄—信広—広一
（久斉）（現当主）

今回発見の「引痘夜話」の末尾の個所には信順所有の「河口氏図書」の朱印が押してある。そして信順所有の種痘書を調べると

痘瘡治術、治痘方函（池田瑞仙著）自筆写本
瘍医新書巻之三十二、接花痘篇第十五（大槻磐水著）
痘瘡水鏡録経験方（勢州橋南鶏著）自筆写本
牛痘略説（杉田信成卿纂述）自筆写本

の四冊があるので、信順はかねがね種痘関係研究をしてゐた事が判る。

この信順は寛政五年十二月二十一日（一七九三）古河に生れ、明治二年三月二十二日（一八六九）七十七歳を以て古河に歿した。

河口家留書帳「年代記」に因ると

文化九壬申二月十三日江戸へ出立
同十六日御目見え致す
同廿日古河着
文化十癸酉二月十七日跡式十五人扶持下さる
文化十二乙亥四月河口壮也（信順の俗名）より杉田玄白え入門許可の奉願口上覚えを藩に提出
五月廿四日信順江戸出立
同廿五日江戸着
同廿六日杉田氏へ入門
文化十三丙子三月六日信順江戸より中か帰りする
同廿一日江戸へ出立
同廿二日江戸着
八月十六日信順熱病頻りなるも
八月下旬平癒
文化十四丁丑七月廿五日信順帰国
信順俗名壮也と云う処祐卿と改む
文政四辛巳三月*専蔵痘瘡する（*信順の弟）
四月*おてつ痘瘡する（*二才、信順長女）
（註、専蔵より赤坊に家族内伝染をした）。
七月廿五日お多喜様（信順の母）専蔵と塩原え入湯出立八月十四日お多喜様専蔵入湯して帰る
文政七年甲申二月廿二日*利位公御入郭（藩公土井利位（としつら）の事）麻疹流行
文政十丁亥正月十一日信順御医師仰せつけられ、貳人扶持御加へ。
（此年解剖慰霊祭を行い正定寺に碑を建つ、万霊塔。）
文政十二己丑二月廿三日祐卿剃髪
天保元年九月二十二日格式是迄の通り御側医勤め薬種料五枚下さる。
天保九年九月十一日不調法に付御側医格御免（註、高野長英と交遊又はかくまった？又は穏切支丹露見？）
弘化五年四月八日本成寺に本尊三宝寄進
嘉永三年河口藩家老小杉監物輔長（すけなが）の三男春三郎五歳に古河で第一回種痘を行う
（但し天保九年以后の分は、筆者補足す。）
即ち以上の年代記を辿ると、信順は杉田玄白の門弟となり天真楼塾で非常に勉強をした事が判るし、信順が四種の種痘書を有する点も判る。又、天真楼を卒えて帰藩五年を

経た時に、弟の専蔵が河口家で痘瘡を発病した為に、信順の長女おてつ二歳に家族伝染をしたので、河口家は大変に困惑したし、信順は相当に医師として苦労をした事と思ふ。

斯うした経験も加わったので、信順は今回発見の「引痘夜話」を所持したものであるし、又、嘉永三年には古河で第一回種痘をした訳である。

処でこの「引痘夜話」は、表紙には「禁売買」を刻し、「自然楼蔵版印」の朱印の朱文字が大きく押されてゐる。内容は大変に面白い啓蒙解説が明快に書かれてゐるが、何処にも、著者名が見付からないと思った。

そこで、昭和四十三年冬順天堂大学医史学教室に小川鼎三教授を訪ねて著者を探索して頂いた処、この小冊子の末尾に「江戸の本石町三つめと云ふまちのかりの宿りにしたためはべりぬ」と記してある個所からヒントを得て、突然小川教授は「それそれ何のそれ」と云い乍ら立ち上りざまに右手の拳で、稍、前かがみになった顔の額を二三度ぽんぽんと軽く叩き乍ら数歩を前後したと見るや、忽ち、「なに、それそれ、利光仙庵だ。おい露西亜牛痘全書を出して見ろ。」と助手から本を受取りざまに先づ表紙をめくると、扉に、全く同じ「自然楼蔵版印」の朱印と共に利光仙庵（としみつ・せんあん）の刻印が顕われた。かくて、小川教授によって立ち処に「引痘夜話」の著者は利光仙庵と判った。

又、この小冊子は利光仙庵の本邦未見の書であるから、非常に価値があると考える。

では**利光仙庵**は、明治前何拾冊とある痘瘡関係の書に於て、何故特に有名なのかと云ふ訳は、次の事柄によって判る。即ち、ジェンナーの牛痘術はシナにいた英国人から先づシナには早く牛痘法が伝わったが、鎖国日本には入らない　それで、シナでは邱浩川が「引痘略」を一八三八年（日本の天保九年）著わし、日本には弘化三年（一八四六）「引痘新法全書」と云ふ名の本で、引痘略は紹介された。

すると、次の嘉永元年（一八四八）になると蘭医モーニッケが痘苗を持って長崎に入港したが、この痘苗は成功しなかった。翌嘉永二年七月バタヴィアに注文の痘痂から成功して本邦に拡まるのであるが、斯様に、幕府を通じての正道、また、当時の鎖国下の正道として、ジェンナーに始まる牛痘術は英人によりシナ、それから日本へと入った訳

である。また、牛痘術や、以前の痘瘡に関する沢山の解説書も、オランダを通じてその知識が入っていた訳である。

ところが、牛痘法はオランダ以外の意外な方からも日本に入って来ていた。それは、千島エトロフ島の番人小頭の中川五郎治がロシア船に文化四年連れ去られ、文化八年迄の五年間、シベリア各地を引廻されてゐる間に、イギリスからロシアに伝わった牛痘法を習って文化九年に帰された。此の時、元長崎通詞の馬場佐十郎がオランダ商館ヅーフから牛痘法の事を聞いて居り、遇々馬場佐十郎は五郎治が函館に帰国の折、ロシヤ語の牛痘書（原書）を持って来た事を知り、丁度函館に通詞をしてゐたので、この原書を反訳して「遁花秘訣（とんかひけつ）」を著わした。即ち、本邦医学に初めてロシヤ洋書を邦訳紹介した本であり、時に馬場佐十郎は卅二歳の文政三庚辰年（一八二〇）であった。

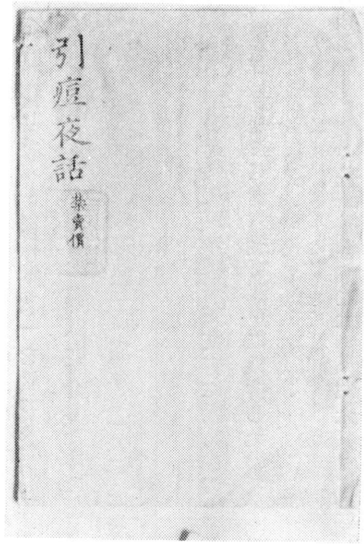
その後、馬場氏は江戸の幕府天文方に勤め中のところ文政五年七月廿七日に卅六歳で江戸に夭折したので、遁花秘訣は上梓出来なかった。が、三河の人、利光仙庵（としみつ・せんあん）は、長崎遊学中に本書の写本（?）を得て、遁花秘訣が邦訳されてから廿有余年を経た嘉永庚戌年に、「魯西亜牛痘全書」と改題抜粋して江戸本石街の自然楼に上梓（校鐫）した。

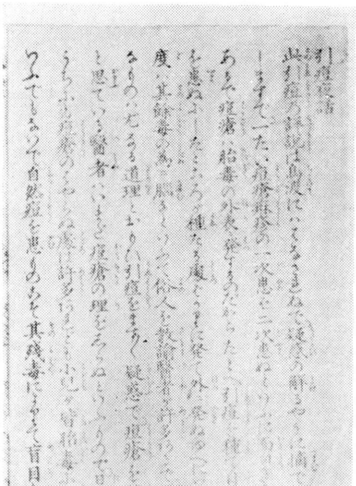
上梓が済むと、牛痘全書の紹介を兼ねて、同じく江戸は本石町三つめの仮りの宿で「引痘夜話（うゑはうそう・よばなし）」の小冊子を上梓した。

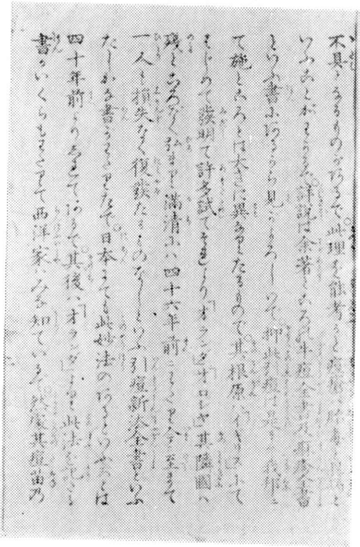
嘉永三年には、長崎から入った牛痘法が、急に日本中に伝わる事になるが、この嘉永三年に利光仙庵の著わした牛痘全書は、その正しい認識に於て本邦医学に貢献した点は顕著であり、しかも、今迄本邦に一部の人しか知られなかった魯西亜医学書からの紹介書であった点が、特異な存在であった。

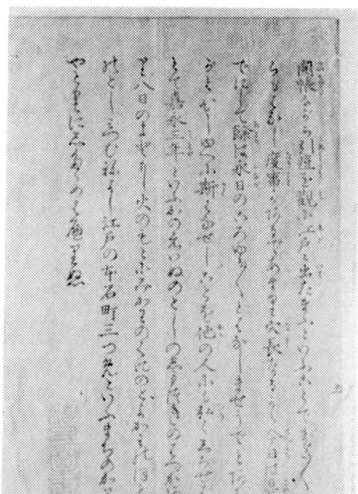
さて利光仙庵『医宗、僊庵、むねのり（宗典?）』は、長崎からオランダ医学を吸収した人なので、ロシヤ牛痘全書を通じても、ロシヤかぶれをする事もなく、要は、ジェンナーの種痘精神を科学的に正しく摑え、この正しい科学的認識の下に、牛痘法を感情論迷妄論を以て妨害する頭の悪い医者も一般人もくるめて啓蒙する為に「引痘夜話」を書き、特に禁売価の印を刻して一般啓蒙に努めた。

茲に「禁売価」の意味は、検認を受けずに出版する場合、または、値段を特につけずに、医師が患者に自由値で売っ


引痘夜話
桑貴愼


引痘夜話
此引痘の話説は鳥渡[illegible]
しますて一た、疱瘡麻疹の一次患ると二次患[illegible]
ある[illegible]疱瘡、胎毒の外表[illegible]引痘[illegible]
を患[illegible]種たる處[illegible]外発[illegible]
度、其餘毒の為に[illegible]俗人[illegible]醫者[illegible]
[illegible]道理[illegible]引痘を[illegible]疑惑て疱瘡[illegible]
と思ている醫者[illegible]疱瘡の理を[illegible]日本の
[illegible]疱瘡の[illegible]許多[illegible]胎毒[illegible]
[illegible]自然痘を患[illegible]其残毒に[illegible]盲目となり


不具となるものがあるて此理を能考へて疱瘡[illegible]
[illegible]評説は余常[illegible]
[illegible]書[illegible]
て施したるは大きに異なるのて其根原[illegible]
[illegible]発明て許多試てきましより「オランダ」「オロシヤ」其隣國へ
[illegible]満清にハ四十六年前[illegible]至まて
一人も損失なく[illegible]引痘新法全書といふ
[illegible]書[illegible]日本にても此妙法の[illegible]は
四十年前[illegible]其後ハ「オランダ」[illegible]此法を[illegible]
書[illegible]西洋家[illegible]知ている[illegible]其痘苗の


関帳[illegible]引痘を説[illegible]江戸へ出た[illegible]
[illegible]長[illegible]
[illegible]
[illegible]断[illegible]他の人[illegible]
[illegible]嘉永三年[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]江戸の[illegible]町三つ[illegible]
[illegible]

てもよし無料で分けてもよしの気持で出版する場合などがあり、引痘夜話の小冊子は大方、こんな気持ちで、普及をねらって出版したものであらう。特別に医師の啓蒙だけを目したものではない。

引痘夜話　禁売買（原文のまま）

引痘夜話

此引痘の詳説は鳥渡にはなされぬで。疑惑の解るやうに摘ではなしますで。一たい痘瘡麻疹の一次患は二次患ぬとふに面白きわけがあるで。痘瘡ハ胎毒の外表ニ発するのだからたとへ引痘を種て自然痘を患ぬにしたところが種たる処ばかりに発て外ニ発ぬゆへにいつか一度ハ其余毒の為ニ脳なといふて俗人を教諭医者が許多あるで。愚昧なりのハ尤なる道理とおもひ引痘をますます疑惑で。痘瘡を胎毒と思ている医者ハいまだ痘瘡の理を志らぬといふもので。日本のうちにも痘瘡のはやらぬ処は許多あれども小児が皆胎毒に脳といふでもないで。自然痘を患ものこそ其残毒によりて盲目となり不具となるものがあるで。此理を能考ると痘瘡ハ胎毒と異病といふことがわかるで。詳説は余著ところの牛痘全書及麻疹全書といふ書にあるから見がよろしいで。抑此引痘は是まで我邦ニて施ところとは大きに異なりたるもので。其根原ハ「イギリス」にてはじめて発明て許多試てそれより「オランダ」「オロシヤ」其隣国ハ残るところなく弘まり満清にハ四十六年前ニわたり今ニ至まて一人も損失なく復発たるものなしといふ引痘新法全書といふたしかる書がわたりたで。日本にても此妙法のあるといふことは四十年前よりしれてあるで。其後ハ「オランダ」より此法を記たる書かいくらもわたりて西洋家ハみな知ているで。然処其痘苗のわたらぬを嘆てをつたことが久しいで。ところで「オランダ」人が種々に工風をして昨酉年の六月其痘苗をはしめて長崎に齎来直に小児ニ種てだん〳〵に人より人に伝種て諸国に引まり江戸にハ昨酉年の冬うつして初て大諸侯の姫君に種て其残余の痘苗を種弘めたで。上方ハこと〳〵くおこなハれるで。江都ハ疑惑人が多くていちばんおこなハれぬで。此疱瘡は原牛痘苗を人ニ種て自然痘を免ること請合の大妙法で「イギリス」「オランダ」にて牛痘を種たる小児に人痘を種て見ても不染又疱瘡児の中に交し居ても不染の斯の如く姓も蕃息から原野荒地までもみな田畑ニするから米ハま

数万人に試て一人も復発たるものなし急度まちがひなき良法ときまつたゆへに万国に弘まりたるもので。其わけも志らずに誹議ものハ実に愚の甚しきといふもので。凡天下の事物習見たるものを常とおもひ罕見ものを怪ハ世の中の人の通情で。習見た古事でも道理のあしき事は廃て罕見新事でも道理のよきものを用ふるのがよろしいで。我邦の武器もむかしハ鉄砲といふものハなかつたで。それが異国よりわたりて道理がよいから用ふるで近時ハ「イギリス」流「オランダ」流の鉄術が種々わたりて尚道理がよいから此節頻におこなハれるで。此牛痘も是とおなしことで。人痘を種るよりハ牛痘の道理がよいから用ふるで。古昔より今に至まで医薬のうちにも此くらい道理のよきたしかなものはないで。此引痘ハ針にて種るゆへにすこしハ血の出こともあるで。痛というほどでハなけれども小児だからなくでそれを見たり聞たりして痛がらふからやめにするなどいふ大馬鹿ものがあるで。是よりむごきことは無病の小児に灸をすえてむごたらしくなかせるで。たとへ引痘にて終日なくにしたところが命にきずかひなく斑痕にだにならぬほどの難有法だからよろしいで。此道理を能わきまへだにすれハ誹議こともないで。さて其種法ハ小児の年齢におなじて両方の臂上に種るので。其種たる処ばかり発出て其他にハ一つも不発て。劇熱などにて悩むこともなしすこしハ熱も出れども多くは遊戯なからすむで。たとへ胎毒虫症等ある虚弱小児といへどもいとふことはないで稀にハ薬を用ふることもあれども多くは不用で。毒忌もきびしくするにおよばぬで。是を江戸中に種るやうになれは流行疱瘡ハ絶てしまうで。諸国不残種るときは日本に流行疱瘡を患ものは絶て一人もなくなること疑なきことで。扨又引痘をすすめるとやましの銭取のやうにおもふ人が多で。中には銭取ニのみする人もあらふで。然し是にハ金を出てもをしくはないで。富人ハ身分相応ニ出がよいで。貧人にはいくらもたゞ種てやるがよろしいで。さりなから余等がするのハさやうな吾一人銭まうけをするくらいの小量わけではないで。天下の人に大金まうけをさせるので。其わけハといふに銭金にてかわれぬ小児の命を救のので。天下の大功是に勝ことないといふは小児の死のがすくないから総て国中に人が蕃息で。人が蕃息と非常のとき軍卒にもさしつかへぬで。人が蕃息たならバ米が不足して高価なりて困といふ人もあらふで。民百

姓も蕃息から野原荒地までもみな田畑ニするから米ハまず〳〵沢山出来ゆへにすこしもこまらぬで。是がふたしかなことなれハ余等の無株までも株しまひゆへに此やうに馬鹿骨折はせぬで。右のわけだから小児の幸不幸ハ両親の決断にあることで。去年より今年ニ至て江戸中ニハ幾万人も種試て一人も損失なし此節自然痘の中ニても種たるものハ一人も患ぬで。あるやしきにて皆牛痘を種た中に一人疑惑ぶかくて強情ニ種ぬところが此節自然痘を患で遂ニとられみな笑ているで。もはや後悔してもおよばぬことてあとの小児も其疱瘡にとりつかれてむつかしいといふことで。まのあたりにも近処で種ても疑惑て不種にいたところが此間自然痘神ニころされて後悔するのがあるて。此節自然痘神に小児をとられるのハ皆強情の老人や両親の不決断ゆへに非命死を促のでなんとなげかわしきことで。或ハあまり寒いから暖気ニなりてからしやう暑から涼くなりてからといふ者あれども此引痘ハ暑寒のいとひなく種てよろしいで。もしや疑もあるまいで。自然痘神にとりつかれぬうちに速く種て安心するがよろしいで。又初生て百日だにたてば早く種るほどかろしいで。此引痘には自然痘神も大閉戸するで。八丈嶋の為朝公ハ大悦で来年ハ開帳ながら引痘を観に江戸に出たまふといふことで。まだ〳〵いくらもはなし度事があるで。あまり穴長なるから今日は是までにして余は永日のころゆる〳〵とはなしませうでと。ある人がとむしゆへに斯はなせしことを他の人にも弘くしらせばやとて嘉永三年といふかのえいぬのとしのしもつきのはつかあまり八日のよともし火のもとにみかわのくにのとよかわのほとりのとしみつむねよし江戸本石町三つめといふまちのかりのやとりにしたゝめはべりぬ。

河口氏図書

(附)(其一)「引痘夜話」の所有者河口信順の長男信寛(寛、杏斎、枕河)は、杉田成卿の高弟であり、明治二年幕府の「種痘館」から免状を得た(現存)。二男の信久(久斎)は明治六年福沢諭吉に入塾し医を修め明治二七年一月茨城県西葛飾郡古河町天然痘大流行に際し十五日間無料種痘を施行し、明治二八年高崎親章茨城県知事から木杯壱個下賜された。

(其二)成島柳北著「柳北全集」(明治三十年七月九日発行博文館)の「常総遊記」の文中に、「自ニ古河駅中央一右

折抵ニ赤塚村ニ野人負ノ児成ノ隊往来。皆赴ニ古河医院種痘ニ也。僻境開化日進寔可ノ喜也。（明治二年記）」

とある古河医院は河口家である。即ち、河口家の種痘尽力の程がよく書かれてゐる。

（其三）「引痘夜話」の発行所「自然楼」は、片桐一男氏に拠れば例えば「安藤昌益が自然真営道（ジネンシンエイドウ）を称した如く、江戸時代の読み方としては、自然楼シゼンロウよりもジネンロウと読む方がよい」。

（其四）馬場佐十郎に就ては、片桐一男著「阿蘭陀通詞馬場佐十郎の天文台勤務とその業績」（法政史学二十一号昭和四十四年三月）に負ふ。

（其五）禁売価の解釈は緒方富雄先生に教わる。

終始、小川鼎三先生の御指導を頂き深謝致します。
本稿の内容は日本医史学会の昭和四十四年七月例会で報告した

Summary

Recently a small book, entitled "Night Story, Introductory to the Vaccination", was found in the Kawaguchi's home library.

This book written by Senan Toshimitsu in 1850. was a primer for vaccination. In the foregoing year the vaccination was at first successful in Japan.

In the same year(1850) S. Toshimitsu published the other famous book for vaccination, which was firstly translated from Russian to Japanese by Sajyuro Baba in 1820.

S. Toshimitsu, therefore, contributed a great deal to propagation of the correct knowledge of vaccination in Japan.

生きた歴史—内分泌学者、シーハン博士小伝

札幌市医療法人中江病院長　中　江　孝　治

A Short Biography of H. L. Sheehan and the Outline of Sheehan's Syndrome

Koji Nakae

私は最近精神病の症状を伴って入院した二例のシーハン症候群を経験した、そしてその一例は剖検によって病因を確かめた。だが精神病の病状に力点をおく病院ではか様な内分泌疾患の診断が意外に困難であることを経験した。

下垂体性悪液質の症候群をはじめて報告したのはデンマークの聖トーマス島生れでハンブルクの医師モーリス・シモンズ（一九一四）であるが、出産時の出血に於ける下垂体前葉壊死の症候群を確立したのはシーハン H. L. Sheehan（一九三七）である、トロント大学の内科主任教授 R. F. Farquharson のモノグラフ、「シモンズ病」によればグラスゴウの大きな産科病院でなされた観察からシーハンは難産後の産褥で死にかけている婦人が、屢々胎盤の残遺や分娩後大出血を伴い、そして種々の程度の下垂体前葉の壊死がみられることを明かにした。

シーハン症候群の症状は次の如くである。

基礎代謝の低下、無力、胃酸の低下、無月経、腋毛及び陰毛の消失、ブドウ糖負荷試験の異常、悪液質、リビドーの喪失、（男性では）陰萎、皮膚の乾燥、眉毛・ヒゲの喪失、頭髪のうすくなること、生殖器の萎縮、蒼白、空腹時血糖の低下（60mg%以下）、トルコ鞍の拡大、歯牙の decay 又は脱落、寒冷に不耐、低血圧（最高血圧90 mm Hg 以下）、体温の異常、色素沈着、（女性では）乳房の萎縮、徐脈、低血糖性昏睡、早老、インシュリン耐性試験殆ど常に異常、血清ナトリウム一般に低下、尿中中性17ケトステロイド消

失又は極めて低い、尿中 11-Oxygenated Steroids 消失又は極めて低下、ACTH に対するエオジン細胞増加ふつう十、塩分中断試験患者は屢々アジソン発作を結実する。

剖検によればシモンズ病では下垂体前葉の後上角部で茎部の前下方部の而も表層の薄い部分に前葉細胞の萎縮した残部がみられるが、シーハン症候群では同じ場所に壊死を免れた腺の残部がみられる。

分娩後の前葉の壊死の病因は正常分娩では前葉に行く血行が生理的に減少する、この場合全身の循環系の著しい虚脱がある場合は前葉への血行が急激に烈しく著しく障害され血管の血栓症、脈血管の静脈洞に梗塞がおこり乏血性壊死をおこすにいたることが可能である。

我が国ではシーハン症候群の報告は第一例はかなりおくれた、一九五六年渡辺及び塚越の報告以来現在七〇例以上の報告があり、又綜説がなされている。そしてアジソン病よりも多くみられる症例であると言われている。

シーハン博士の業績は内分泌学に於ける偉大な研究として確立している。

最近サンド製薬会社が出した雑誌サンドラマ「最近五〇年の医学の進歩」でもホルモン研究の劃期的業績としての H. L. Sheehan・Postpartum necrosis of the adenohypophysis が一九一四年のシモンズと共にあげられている。

その様な訳で私はシーハン博士の小伝を知りたく思った、傑出医の人名辞典で有名な Biographisches Lexikon は一八八三年出版以来三版を重ねているが、一九三〇年以前の人名に限られている。手がかりは Minerva（最新刊が一九六六年）か、World of Learning（毎年改版）、或いは Who's Who 位のものかも知れない、それで Acta Endocrinologica 一九六五年の論文からシーハン博士がリバプール大学に勤務されていることを知り、むしろ直接書簡を差上げて、その医学的経歴や肖像を入手したいと考えた。

シーハン博士の丁重な回答によれば同博士の経歴は次の如くである。

彼は一九〇〇年イングランドの Carlisle で生れた。一九二一年マンチェスター大学の医学部を卒業した。一九二一～一九二七年は臨床医として活躍した。一九二七～一九三四年マンチェスター大学病理学の「講師」lecturer、腎の生理と病理、ランゲルハンス島のベータ細胞の破壊及び実験的糖尿病について研究。

一九三四～一九三五年、ロックフェラーのフェロウとし

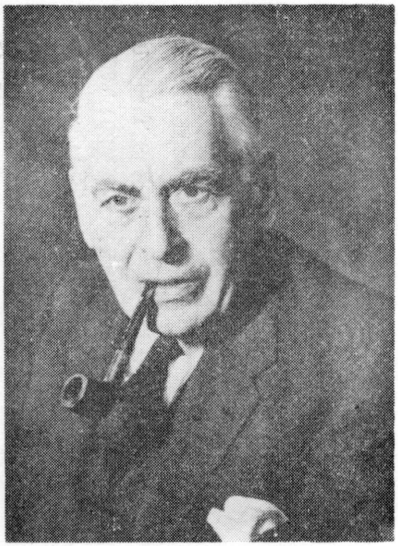
てジョンズ・ホプキンス大学で腎生理について研究。

一九三五～一九四六年、スコットランドのグラスゴウ王立産科病院 Glasgow Royal Maternity Hospital の研究部長、ショック、妊娠中毒症、下垂体壊死とヒポピツイタリズム等について研究。

一九三九～一九四五年、陸軍々医として服務、伝染性肝炎その他種々の疾患について研究。

一九四六年リバプール大学病理学教授。ヒポピツイタリズム、皮質—腎の壊死、無尿症等の研究。

なお一九五四年にはフランスに招かれラエンネック病院で分娩後の下垂体壊死について講義。



H. L. SHEEHAN

一九六一年同じくラエンネック病院でヒポピツイタリズムの講義。

シーハン博士は最近病理学教授を退職、現在同じくリバプールの熱帯医学校 School of Tropical Medicine に籍をおき下垂体と視床下部の研究をつゞけている。住所は、School of Tropical Medicine, Pembroke Place, Liverpool L 3 5 QA. England である。

彼は日本のシーハン症候群の症例を翻訳し一七例だけ集めている、そして現在七〇例以上もある症例についてこれを集めて送ってほしいと希望している。複写があればあちらで翻訳ができるとも言われている。

私は臨床から生れた偉大な業績を発表された幸運にめぐまれたシーハン教授の小伝に対し深い感動を覚えるものである。

なおシーハン症候群という臨床から下垂体の血管分布という問題が提起されることになるが、これについては L. M. F. Landsmeer の最近の論文 A Survey of the Analysis of Hypophyseal Vascularity, を参照されたい。

文献

1) R.F. Farquharson : Simmonds' Disease, 1955, C.C. Thomas.
2) Andrew V. Nalbandov : Advances in Neuroendocrinology, 1963, University of Illinois Press.
3) Louis J. Soffer : Diseases of the Endocrine Glands, 1956 Henry Kimpton, London.

適塾門下生坪井信立に就て

青木一郎

On S. Tuboi, a Pupil of Ogata's Dutch Learning School

Ichiro Aoki

私が初めて坪井信立の姓名に興味を持つたのは、昭和十七年六月五日発行の緒方富雄博士著「緒方洪庵伝」の適々斎塾姓名録中に二四四頁「美濃池田、坪井信立、有故破門」と出てゐることに始まる。私はこの坪井信立といふ姓名を坪井信道、信友、信良と共に上に信の字がつく二字の名であるし、信道と同様美濃池田の出身であるので、何となくぼんやりと信道に血縁のある一族の中の一人であらうと考えてゐた。しかしそれ以来時々信道について検べてゐたが、信友の名は度々出て来るものの、信立についてはただの一度も見ることを得ずに長年月が過ぎ去つた。ところが昭和三十五年八月、緒方洪庵先生生誕百五十年事業の一つとして緒方門下生の資料蒐集について、調査依頼報告紙が日本医師会雑誌に挿入されてゐた。これを見てまづ頭に浮んだのが坪井信立であつた。しかし如何にしても報告すべき資料が皆無にて、雲を摑む思いで、その責が果せずして、報告は所郁太郎のみにて終つてしまつた。次に昭和四十二年五月十日、坪井信道顕彰碑が生地である揖斐川脛永に建立されて、その除幕式が行はれた。その折、信道曾孫坪井誠太郎博士にお逢いして、信立の事をお尋ねしたら、全く知らないとの御返事であつた。そこで私は竟に信道の一族ではないだらうと思ふに至つた。さて振り出しに戻つて信立は何と読むのであらふか、「しんりふ」であらふか。そもそも信道は「しんどう」信友は「しんゆう」信良は「しんりよう」と読んでゐる。しかしこれは正しくは各々

「のぶみち」「のぶとも」「のぶよし」と読むべきである、と揖斐川町文化財保護委員安藤国司氏は云はれる。信道を「しんどう」と読むなれば織田信長は「しんちよう」秀信は「しゆうしん」となる理屈である。成程信がつくのは織田家の「しるし」でもある筈である。しかし信道は自ら「真同」と署名したのが残つてゐるし、適塾門下生調査資料書には信良は「しんりよう」と仮名がふつてある。如何なものであらうか。しかし私も少なくとも信道は「しんどう」ではないと思ふ。信立は何と読むのか分らない。むつかしいことである。

さて私は過日、信道書翰所有者坪井重朗氏宅にて同氏より三代前勇助に宛てた信良の書翰を見せて貰つた。勇助は信道が自分の故里に最も親密に交際した人であり、信道に依頼されて信道両親墓石建立に努力した人である。稍々長文なるも次の如きものである。

「十一月廿四日御堂御状 当十二日到来 拝見仕候。亡父遠逝之御悔誠ニ難有又仏前へ御丁寧ニ香奠御備被下候段万々御念入之儀奉恐入候。実以小子之愁傷当惑御憐察可被下候。磯吉殿方ゟ之悔状金子入慥ニ入手仕候。即述書指出申候可然御伝声可被下候。扨病中為御見遣御心配被下候鮎粕漬一曲一昨十一日慥ニ入手、折角思召之事故即仏前ニ備置申候。次ニ当方事万事指当小子之大迷惑、先長州屋敷之方、是迄信友ノミ出候筈ニ候処、是亦幼年中ニ勤向等も出来兼候事ニ候得ハ定て禄も大ニ減可申存候。尤未タ忌中故何之沙汰も無之何レ来春二月頃ニ不及候而ハ相分申間敷様子ニ候右ニ付テハ小子事家業専ら相勤不申候てハ大勢之家内中ニ引受養育致候事六ケ敷相考申候。尤老父存生中彼是受納も留り、病用も大流行之事故夫ニ而手一杯ニ暮居申候処、何分ニも八十日余平臥、終ニ養生不叶仕合何角入用殊之外夥敷中ニ貯畜ト申而ハ無之少候ハ借財も有之程之事、此上家内大勢食客杯も多々有之候故中ニ小子ニ而ハ病用出精仕候而も迚も力及申間敷ニ付、爾後ハ先ニ倹約第一ト相心得可申候。因而婢僕も成丈相減シ食客も成丈減度心得ニ候。就夫信立子事も只今迄ハ老父之力ニ而養育仕居申候得共以後ハ御断申上度存申候。則外ニ之書生同様ニ塾ニ而飲食為致飯料も入様ニ相成申候。甚以御気之毒私ニ於ても残念磯吉殿之思召も如何ニ候得共何分私之力ニ及兼申候。尤学問之事ハ小子も勤而出精御互ニ研精致申候ヘバ御案被下間敷候。夫共別ニ御思召も有之義ナレハ何方へニ而も御引越不苦候

へ共信道没後も門人ハ矢張不相変大勢寄宿致居申候得共始終身之上之為ニハ拙宅ニ御出被成サヘスレハ逐々修業出来被成候事ト相考申候。尤唯今迄ハ調合不及尤相頼置申候故飯料ニハ不及処此節右之役目ハ相除申候故専ラ自分ニて出精致候得ハ自由ニ学文出来可申候右ニ付テハ信立殿年中之金子入用も唯今迄〻ハ彼是多々入用之筈也。右之訳乍御面到磯吉殿へ不悪御申入置可被下候、尤唯今迄ハ入用一　如以程ニて相済申候哉知不申候得共小子杯の書生仕候時ハ先一年ニ倹約サヘスレハ十両〻出入位之事ニ候外之書生も右同段之事也是も当人之心得仕第ナレトモ一月ニ小一両ハ是非入用之者也、以後も矢張信立殿事拙宅ニ御置之思召ナレハ金子ハ矢張私迄得御遣被成候得ハ後は御預り申置候て入用次第少々宛小遣相渡申上様ニ可仕候。○扨病気見舞状遠着ニ付信立殿〻腹立申上候様子ニ而誠ニ尤御事訳御事一々御尤至極聊御恨不申候、遠方ハ何方ニても同段之事ニ御座候、必ず御配慮被下間敷候。

○信道事系図委細相分不申候て困申候事有之候間乍御面到後便ニ坪井家系図之大略御写御遣被下度奉希申候、当時石碑等相建申度ニ付入用事有之候得共相分兼困入申候得ハ後日為御知被下度奉希候、先ハ御礼旁貴答迄申上度草々以上

十三日　　坪井信良

坪井勇助様

尚時気厳寒御自愛専一ニ奉希存候。呉々も磯吉殿へ不悪小子之心中御酌取御話被下度何分ニも気之毒恥入申候得共貧富も人々之定命ナレハ無致方又々今明年之小子之様子次第何卒食客も大勢養置盛ニ成様仕度心得ニ御度候。兎も角も一両年ハ大倹約之筈ニ相決居申候。　以上」

この書翰によつて私は種々な事柄を知るに至つた。逐次これを述べてみたいのである。

まづ問題の信立のことである。この人は私の検べた事からも想像すればどうも坪井磯吉の子息にて坪井勇助が親元引受保証人となつて坪井日習堂学塾へ修学依頼された人である。何時頃江戸に出で入塾したのか不明であるが、この書翰により信道門下生であることは明らかであるが。美濃出身にて信道門下はこの人と大垣藩医若曾根宗桂の二人しか私は知らない。信立は私が思つてゐた信道とは血縁はなく、全くの他人で織田信長の家臣坪井佐治兵衛――この人が関ケ原役にて岐阜落城の折、城主秀信公の遺子即ち信道の祖を連れ逃亡し坪井姓を与えた――の子孫の分家筋であ

ることが分つた。つまり信道は信立にとつては主君の系統だが、助け出されたことについては信立系統は信道の恩人筋になるわけである。現在この坪井磯吉は絶家の如きにて坪井家の菩提寺である揖斐川町和田西蓮寺にて検べてみたが、信立といふ人は見当らずに終つたが、信道が十一畝二七歩の田地を寄贈してゐたために信道両親の燈明は終戦まで絶えることがなかつた。

信道病い重症となり—胃癌、合併症肺結核—信立が故里の親元勇助に早速御見舞状を差し出すべく依頼したものの、それが遠着したらしく信良も困つた様である。御見舞品として鮎粕漬が届いたものの十一日であつた—死亡八日午後二時—、しかしこれを信道仏前に供えた。この鮎は恐らく揖斐川産のものにて勇助自家製の粕漬であらう、信道にとつては懐かしき故里の幼時遊びし揖斐川の鮎である。

信道の霊来つて受けたであらう。当時江戸に於て三大蘭方医家の一人と云はれ、大流行の信道も八十余日病臥の上死亡した後は、少々の借財と多数の門下生が残り、これを引き受けて信良の困つた有様がよく分る。このため信良は財政引き締め策に出でて、信道存命中はどうも無料にて修学させてゐた信立を以後は断わつたのである。しかし勇助が金子を送るか送らないか分明しないのに断わつてゐるのである。又信立は可成りの道楽者にて放逸な生活を送つてゐたらしく—これが将来緒方塾故有破門の一原因になつたと思はれる—信道は勇助に対して断わり切れなかつたのではないだらうか。勇助も又前述の佐治兵衛の系統であるからである。

以後坪井塾にて修業させる心算なれば、信良宛一ヶ月一両程費用を送つてほしい、一応預つておいて、入用の折々には少々宛小遣を渡すとあるからには、本人には一度に全部渡せない程に信用がなかつたとも云い得る。事実勇助は信道没後一ヶ年程信良に送金してゐるが、信立の素行治まらなかつたのであらうか、竟に信良は諦めて信立を退塾させて後、緒方洪庵に後事を依頼した。即ち嘉永二年十一月信立は適塾に入門、姓名録の第百面第二番目、且第二百人目に署名したものの、有故破門となつたのは何時頃か不明である。その後の行末も墓所も共に未だ同様である。信良は洪庵には非常に信用があつたため、信良の依頼にて入門させたものの、結果に於ては信立は両師を裏切つたこととなる。

信道死後墓碑建立に当つて坪井家系図が不明のため、信

良は困つてその大略を知らせてほしいと勇助に書き送つた。折り返し勇助は系図を知らせた筈である。即ち塩谷世弘撰文による「誠軒坪井先生墓碑銘」はそれによつて作製されたものである。坪井家系図については勿論信良は知らなかつたらうし、又信道すらも余り知らなかつたのではあるまいか。坪井九馬三博士も勇助宅へ足をはこばれたことは数回あつた。

信良は坪井塾の責任者となつて如何に財政的に困つたのであらうか、信道程の大家も僅か八十余日の病臥にて借財が残つたことは、現在の開業医にては一寸考えられないことで、信道の仁を主にした生活について大いに考えさせられるわけである。

かくの如く信良書翰によつて坪井信立について知ることが出来、その才人多き学系と人物を少しく検べることが出来、今後の手がかりを作り得て幸甚であつた。

Summary

The name of Sinritsu Tsuboi is found in the list of pupils of the Tekijuku, Ogata's school, with an additional note saying that he was expelled from there. Nothing has been known hitherto about him.

The family Tsuboi is famous for Dutch learning in Japan, but we could find nobody of this name in the famous Tsuboi's family. Recently the authnr encountered this namg in a letter written in 1848 from Sinryo Tsuboi to Yusuke Tsuboi. This letter shows that Sinritsu did not belong to the famous family, but simply a pupil of Sindo Tsuboi, father of Sinryo Tsuboi. After the death of Shindo, Sinritsu changed to the Ogata's school. But perhaps because his character was prodigal and very dissolute, he might be expelled.

嶺春泰伝追加

Additional Remarks on the Biography of Shuntai Mine

緒方富雄
Tomio Ogata

さきに発表した「嶺春泰伝」（日本医史学雑誌第一四巻、第三号、昭和四三年一一月）のなかで、嶺春泰が杉田玄白等のターヘル・アナトミアの翻訳の仕事に直接に関係したという通説は疑わしいことを述べた。

ターヘル・アナトミアの翻訳は、安永三年（一七七四）八月「解体新書」として刊行された。春泰は安永六年（一七七七）六月十五日に高崎侯の御匕役になったが、当時の春泰の医術の根本はまだ漢方であったにちがいないことも考証した。

一方、宇田川槐園の撰した「嶺春泰先生之碑」の文に、春泰がオランダの医学の精密なのを知って、前野蘭化についてオランダ語を学び、その学にすこぶる通じ、諸治術をほどこして、しばしば殊効があったとある。オランダの医学を学んで、殊効ある医術をほどこせるようになったのは、解体新書のあと、翻訳が外科、内科の書におよんでからのことを考えるのが自然とおもわれる。

これらの記録から、わたくしは、春泰が蘭学に関心を持ちはじめたのは、解体新書完成ののちであって、ターヘル・アナトミア翻訳の仲間には加わっていなかったのであろうと考えた。

ところが、わたくしの春泰伝を読まれた中野操博士から、春泰の名が山脇家入門帳に出ていることを教えられた。わたくしはこれの所蔵者武田薬品工業株式会社図書室におねがいして、その部分を含めた前後のコピーを送っていただ

いた。

この資料は、入門帳の写しであって、その部分は、全く同一人の筆跡である。下端のハリ紙の部分も、原本の花押の部分を別に写したもののようである。

全体にわたって虫食の部分が多いが、春泰の部分はつぎのように判読できる。

同年
三月十六日
同前

松平右京大夫殿家来
江戸　嶺春泰
吉川玄瑞紹介

ハリ紙
泰（下に花押）
年二十九歳

「同年」とは、前後の関係から「安永三年」（甲午、一七七四）であり、「同前」とは、まえをうけて「於江府執贄」。ハリ紙の部分は虫食がはなはだしく、「泰」の下にある花押の全容を見ることができない。年齢の「九」に当たるところは、ほとんど判読できないが、この年春泰が二十九歳であることを知ったうえでながめると、それらしい墨のあとが見つかる。

春泰が山脇の門に入ったという事実は、まことに重要である。

山脇家入門帳は、いうまでもなく、「蔵志」の著者山脇東洋（一七〇五―一七六二）の時代からはじまる塾の入門帳で、中野博士によると享保十三年（一七二八）から天明二年（一七八二）までの五十五年間にわたり、四九四名の姓名がしるされているという。春泰が入門した安永三年（一七七四）は、東洋の子東門（一七三六―一七八三）の代になっていた。すなわち、春泰が江戸で贄を執って東門の門人となったことを示している。

山脇塾は京都にあって、東門は京都に住んでいた。ところが、春泰が江戸で贄を執ったというのはどういうことであろうか。この点について、片桐一男氏は、東門の「家譜」を写して示された。

安永三年正月忰玄沖十七歳罷成付、召連御目見奉願之通被仰付候に付、江戸参府。同月十五日浚明院様、孝恭院様御目見。在府中初而腿脚掣痛覚え。同年三月十九日出立帰京。

（注）浚明院　十代将軍徳川家治、孝恭院　徳川家基

これによると、奥医師で法眼の東門は、この年正月に京

都から江戸へ出てきて、子玄沖を将軍に御目見させ、三月十九日まで滞在している。したがって、春泰が三月十六日に東門に面接して束脩をおさめ、門人になったことは、時間的には矛盾しない。

問題は、こうして入門した春泰は、江戸に住んで教を受けたのか、京都へ移ったのかということである。春泰の「由緒書」には、京都で勉強したことはしるされていない。由緒書は君侯との関係の公的なことだけを記入するものであるから、東門の門人となったことは、由緒書に書くすじあいのものでなかったのかもしれない。

いずれにしてもこの事実は、春泰と蘭学とのつながりの時期について、まことに重要な問題を提供している。

安永三年三月十六日の春泰入門の年の八月付で「解体新書」が刊行されている。春泰の東門塾入門はそれより約半年まえのことになる。「解体新書」のまえに出た「解体約図」は前年の安永二年（一七七三）一月に版になっている。おなじ年の一月付で杉田玄白が建部清庵にあてたてがみ（和蘭医事問答、第一返信）にも、すでに「解体新書」がほぼ完成したことを書いている。この翻訳事業の進行と、春泰の行動とのあいだに関係があるかないかについては「春嶺伝」で考証したから、くりかえさない。

第二に、春泰が東門の門人になったことの蘭学との関係における意義である。

東門の父山脇東洋は、みずから解体を見て、「蔵志」をあらわし、「先物実試」をとなえたが、本質的には漢方の古医方家であり、のち漢蘭折衷派の祖となった人である。しかしそのころの蘭方医学といっても、もとより解体新書以後の蘭方医学に比すべきものではない。東洋の子東門も古医方家で、刺絡で名をあらわした。解体を三度もおこない、解剖の重要なことをとなえたという。

春泰が東門の門に入ったのは、もとより、自分の医術の充実向上のためであろうが、春泰が、杉田玄白等の翻訳事業に熱心に協力したうえで、なお漢方医学を学んだと考えることは、なかなかむずかしい。なぜなら、玄白をはじめ、西洋医学の真髄にふれたものは、みなこれに魅せられて、漢方をすて、西洋医学（蘭方医学）を学ぶ決心をし、初期には、これをもりたてることに力をつくしたからである。玄白の「蘭学事始」によると、春泰もそのような熱心家になったようであるが、それは、春泰が東門に学んだあとのことと考えるのが自然であろう。

玄随の「嶺春泰先生之碑」を読みかえすと、「安永六年丁酉命為侍医」とあって、春泰が高崎侯の侍医になったことをしるしたあとで、侯の気にいられたことを述べ、「後知阿蘭之精覈乎医事、従蘭化、為欧邏巴之言。頗通其学。」とつづいている。引用の冒頭の「後」を、安永六年侍医になった後ととれば、春泰が前野蘭化にオランダ語を学びはじめたのは、安永六年（一七七七）より後のことになる。碑文をこれほどきびしく解釈していいかわからないが、ターヘル・アナトミア翻訳という画期的な仕事に春泰が関係したことに、玄随が全く触れていないのは、やはりそのようなことがなかったことを示すものと解していいのではあるまいか。そして、ちょうどその時期に、春泰は、玄白等の翻訳事業と関係なく、山脇東門に学んでいたと解していいのではあるまいか。

この追加に書いた資料について教示をえた中野操博士、片桐一男氏、武田薬品工業株式会社にお礼を申しのべる。

Summary

Evidence is presented in this paper that *Shuntai Mine* did not participate in translating *Kulmus' Ontleedkundige Tafelen* under the leadership of *Ryotaku Maeno* and *Genpaku Sugita* (during 1771–1774). In a registration book (record) of *Yamawaki's* school of Chinese medicine *Shuntai Mine's* name is to be seen as registered on March 16, 1773. The author interprets that his registration must have taken place before he joined the group of Dutch learning and medicine.

鷗外の史伝「渋江抽斎」の校勘記（三）

松木　明

Akira Matsuki, M. D. Hirosaki, Aomori, Japan.

A Note on Ogai's "Chusai Shibue" (3)

7

「五百の假親比良野文蔵の没したのも、同じ年の四月二十二日である。次いで嗣子貞固が目附から留守居に進んだ」（その三十九　一九六ページ）。

同じ年というのは嘉永三年のことで、抽斎が四十六歳の時である。

ところが弘前藩御家中明細書によれば、比良野文蔵の事蹟は次のようになつている。

比良野文蔵（六代）

寛政十年七月二十八日　跡式
文化三年四月二十三日　御目付
文化十三年十月二十六日　御中小姓頭格
天保四年正月十一日　江戸足軽格
天保十四年正月十一日　大寄合格
嘉永三年四月二十四日　病死

これによつて文蔵が没したのは嘉永三年の四月二十二日ではなくして、四月二十四日であることがわかる。おそらく保が鷗外に呈出した資料に於いて誤りがあつたものであらう。

8

「津軽順承は一の進言に接した。これを上つたものは、用人加藤清兵衛、側用人兼松伴太夫、目付兼松三郎である」（嘉永六年）（その四十六　二一五ページ）。

「罪を得た数人は血統を重んずる説を持して、此養子を迎ふることを拒まうとし、順承はこれを迎ふるに決したからである。即ち側用人加藤清兵衛用人兼松伴太夫は帰国の上隠居謹慎、兼松三郎は帰国の上永の蟄居を命ぜられた」（安政三年）（その四十九　三二四ページ）。

「しかし成善は念のために大参事西館弧清・小参事兼大隊長加藤武彦の二人を見て意見を叩いた。二人皆成善は医として視るべきものでないと云つた。武彦は前の側用人兼用人清兵衛の子である」（明治三年）（その八十七　二一七ページ）。

さきの嘉永六年の文では用人が加藤清兵衛で、側用人が兼松伴太夫とあり、後の安政三年の文では加藤清兵衛が側用人で、兼松伴太夫が用人と正反対になつている。後の明治三年の文では加藤清兵衛が用人と側用人とを兼ねていて、いずれが正しいのかわかりかねる。また加藤清兵衛の用人と側用人とが比較的短い期間に頻繁に変つたものとも考へられない。

抽斎の嗣子保が資料として鷗外に呈出した「渋江家乗」には明治三年六月十三日藩知事承昭公は弘前附近の大星場といふ所に於いて兵の大演習を行ひ、少参事加藤武彦（嘗て用人たりし清兵衛の嗣子）を総隊長として盛に武を練らせた」とあつて、これでは加藤清兵衛が用人となつている。

藩日記（江戸日記）の嘉永六年及び安政三年の条には、加藤清兵衛、兼松伴太夫ともに用人とあつて、藩日記の上では用人側用人の区別がみられない。元来用人といふのは江戸時代の職制では幕府、大名貴族などの家で、老臣の次に位し、出納雑事に当つた職であるが、これからみれば、側用人は主君の側近に侍して、主としてその私的雑事を掌つたものである。

これらによつてみても、おそらく用人加藤清兵衛が正しいのであらう。その職名が変つたのでないとすれば、おそ

らく後の文の記事はいずれも鷗外の書き違いではなからうか。

9

「年月は詳にせぬが、長尾氏の二女の人に嫁したのは、亀沢町に来てからの事である。

はじめ長女敬が母と共に坐食するに忍びぬと云つて、媒するもののあるに任せて、猿若町三丁目守田座附の茶屋三河屋力蔵に嫁し、次いで次女詮も浅草須賀町の呉服商枡屋儀兵衛に嫁した」(その七十　二七五ページ)。

「安の女二人のうち敬は猿若町三丁目の芝居茶屋三河屋に、詮は蔵前須賀町の呉服屋枡屋儀平の許にゐた」(その九十一　三二六ページ)。

次女詮の婚家先は前の文では枡屋儀兵衛とあり、後の文では枡屋儀平とあつて、それについては何の説明もない。

しかるに保が鷗外に呈出した「抽斎の親戚並門人」には升屋儀兵衛とあるので、儀平が誤りで儀兵衛が正しいことがわかる。したがつて後の文を儀兵衛と訂正すべきであらう。

なお「抽斎の親戚並門人」には枡屋でなく升屋とある。枡も升もともに同訓であるところから、鷗外が枡の字に訂正して用いたのであつた。

10

「抽斎没後第三年は文久元年である。……周禎は同じ年の八月四日を以て家督相続をして、矢島氏の禄二百石八人扶持を受けることになつた。養父優善は二十七歳養子周禎は文化十四年生れで四十六歳になつてゐた」(その七十一　二七七ページ)。

周禎は文化十四年生れだと文久元年には四十五歳でなければならない。すなわち四十六歳は誤りで、周禎の年令を四十五歳と訂正すべきである。

(未　完)

日本医史学会例会記事

七月例会　七月二十六日（土）

於順天堂大学医学部五号館

一　福沢諭吉の種痘再種の説　　**大滝　紀雄**

口演の詳細は本号に原著として収載。

二　利光仙庵著　引痘夜話について　　**川島　恂二**

口演の詳細は本号に原著として収載。

三　欧州ホメオパシー医薬の今昔　　**吉田　一郎**

九月例会　九月三十日（火）

於慶応義塾大学北里図書館

一　歯科の古画と処方　　広木　彦吉

二　アンブロアズ・パレーについて　　佐藤　美実

科学に立脚した現代医学は一六世紀にその曙光を認めた。その近世紀医学の扉を開いたひとりにアンブロアーズ・パレがある。パレは一五一〇年にフランス国メーヌ県の中にある今日のラバール市の中に編人されておる一寒村に生まれた。彼の父は理髪師であり、実兄も義兄も理髪師外科医であった。彼は家貧にして充分な教育も受けずに幼少を過ごし、一五三二年から三年にパリに出てオテル・ディユー病院につとめ、次いで軍属となって戦傷患者の診療を手伝いなどしていたが一五四一年に理髪師外科医の資格をとり、その年結婚した。彼はアンドレアス・ベサリウスの人体解剖学を常に繙き、それに基づいて外科診療を行ない、堅実な手術に努めた。また彼自身人体解剖に研究を重ねて人体解剖学の書を発刊する程解剖学に熱心であった。彼はフランスが国外との戦争、例えばイギリスその他との交戦やフランス国内での王侯同志の戦いなどにしばしば出陣して銃創切創等の損傷その他一般軍陣医学に関して自ら多くの研究をする機会をもった。これが彼の外科学にどんなに貢献したかわからない。そして益々新しい外科学を開発しその実験は全身に及んだ。かくて彼の外科学は益々進歩発達して世界を風靡した。また一方女性を対象として産婦人科の研究にも興味をもち幾多の産婦人科手術に新生面を開いた。中でも特に彼が興味をもち彼の自慢とするところの産婦における胎児定位廻転術の開発は爾来世界各国で実施採用され、世界のすみずみにまで普及して今日に及んでおる。彼は多くの手術用の器具を発明し、またよく著述に勉め多くの書を出版しておるが、その中で我が国医学殊に外科学を開発したものは彼が一五七五年に出版した外科学である。本書は初版後度々改版されて第四版に及んでおるが、その第三版が一五八二年に出されてこれが彼の死後一五九二年にまた一六〇一年にそれぞれ蘭語と独語に翻訳されたものが我が国に入って楢林鎮山や西玄哲等オランダ流外科となり我が国の外科治療に役立ったものと思う。

一五九〇年パリ市が革命軍のために包囲された時、飢餓大衆の地獄の叩びの渦中にパレはその老軀を投じ、パリに平和の願いを訴えつつ突如八〇年の生涯を閉じた。時に一五九〇年一二月二〇日のことである。サン・タンドレ・デ・ザール教会に葬られた。（四五歳、六五歳、六八歳、七二歳の世界に残るパレーの四肖像スライド写真供覧）

十月例会　十月二十五日（土）

於順天堂大学医学部一号館

一　日蘭交渉史に関するシンポジウムの成果

緒方　富雄

本年（一九六九年）九月七日から十三日まで、オランダ国ライデンにおいて「日蘭交渉史に関するシンポジウム」(Symposium on the Historical Relations between the Netherlands and Japan) が開催された。ライデン大学日本研究センターと日本の蘭学資料研究会との共催である。会長は日本研究センター所長フリッツ・フォス教授（ライデン大学教授）、副会長は蘭学資料研究会会長緒方富雄（東京大学名誉教授）。日本側の参加者四十六名（うち同伴家族六名）のうち三十五名の三十七題の発表があった。

詳細は蘭研研究報告第二二七号（昭和四十四年十月）にゆずり、ここでは日本医史学会会員の発表と医学関係の演題をかかげる。

一、十七世紀における日蘭医学の交渉　大島蘭三郎
一、Herman Boerhaave (1668—1738) がわが蘭学期に日本医学に及ぼした影響　阿知波五郎
一、日本における Willem ten Rhyne　大塚　恭男
一、蘭訳書による Hufeland 医学の日本における受容　石原　明
一、日本の近代産科の初期にみる蘭書を通じての西洋医学の影響　酒井　シヅ
一、牛痘種痘法の伝来と普及　井上　忠
一、ポンペと日本医学　大滝　紀雄
一、蘭学者のヒポクラテス画像崇拝　緒方　富雄
一、蘭訳書による川本幸民の製糖理論の導入　井上　悌雄
一、大野藩におけるオランダ書の翻訳出版　岩治　勇一
一、岡山藩医学館教師ロイトル　中山　沃
一、新潟医学校における三人のオランダ人教師　蒲原　宏
一、大阪でのオランダ医学　藤野恒三郎

ほかに九月八日の開会式において、緒方のつぎの演題による英語で特別一般講演があった。

Tomio Ogata : Birth, Growth and Development of Rangaku (Dutch learning), the First 50 years of Rangaku

会期中に、アムステルダム国立博物館東洋部、ハーグの国立中央文書館、ライデン大学図書館、国立民族博物館等において、特別展示があり、参加者にとってそれぞれ多大の収穫があった。

なお研究発表はなかったが、巴陵宣祐と今田喬士の二会員が参加した。

今回のシンポジウムの成果として、研究発表のほか、オランダにある豊富な蘭学資料に直接に接することができたばかりでなく、これまで不明であった資料を発掘しえたこと、オランダ側の研究者と親しくなり、今後の研究資料の相互提供が円滑になったことなど、そのいちじるしいものであろう。

二　解体新書の付図とライデン大学教授ビドロー

小川　鼎三

解体新書の付図はクルムス解剖書の他にトンミユズ、ブランカール、カスパル、コイテル、アンブルの諸書から採ったことが明記されており、篆書式の木火土金水と思われる符号が付いて各図の由来が示されている。符号のないのはすべてクルムス書のものである。

終りの四図は手と足の筋肉、腱、骨を描いており、それぞれ二

ページにわたる大きな図で、残りの全部のものと甚だ調子がちがっている。符号によると「安武児外科書解体篇」から採ったという。このアンブルはフランスの大外科医アンブロアズパレーであろう。しかしその全集の解体篇をみても、この四図が載っていない。

この四図はオランダの医学者ビドロー G. Bidloo(1649—1713)の解剖書（ラテン語本初版一六八五、オランダ語本一六九〇）から採ったものと最初に指摘したのがC. R. Boeer で、ついで F. Wagenseil も同じ考えを述べ、杉田がアンブルとしたのは誤りであると発表した。私どもはパレー全集をしらべて、その図がないことから、杉田玄白もしくは小田野直武の考え違いだろうと思うが、ビドローの解剖図が直接にとられたかどうかに若干の疑問が残る。

ビドローの解剖図（画家は Gerard de Lairesse）はそっくり英国のカウパー William Cowper（1666—1709）がビドローに断わりなく、彼の人体解剖書（英語本、一六九七）に借用して、両者の間に争いが起きている。私どもはまずカウパー解剖書（ラテン語本、一七三九）を労働科学研究所のゲッチンゲン文庫でみて、ついでビドロー解剖書（ラテン語本、一六八五）を同研究所およびロンドンのウエルカム医学史博物館の好意により調べることができた。図の大部分（一一四のうち一〇五まで）が一致し、説明文はカウパーの方が詳しい。解体新書の問題の四図が酷似するものはその一〇五の中にある。

英国王ウイリアム三世の侍医としてロンドンに住んだこともあるライデン大学教授ビドローの略伝と、球尿道腺にその名を残した偉い解剖学者兼外科医でありながら、ビドローの解剖図を剽窃したという汚点をもつカウパーの生涯を簡単に述べた。

十一月例会　十一月二十二日（土）

於慶応義塾大学医学部北里図書館

一　William Smellie とわが国の西洋産科との関係

酒井　シヅ

ウィリアム・スメリー（一六九七—一七六三）はイギリスの産科学の師と呼ばれている。彼は十八世紀の産科学が確立する時期にロンドンで産科を開業し、多くの弟子を教えた。彼の業績は、綿密な観察と、解剖学的知識に基づいて正常分娩の機構を解明し、それまで長く信じられていた迷信をつぎつぎに崩し、産科を産婆の手から医師に移したことや鉗子の使用を広く知らせしめたことである。

日本には彼の A Sett of Anatomical Tables（一八五四）が出版後まもなく入った形跡がある。しかし、当時は英語を理解することができず、その図から理解しうること、またヒントを得たにとどまった。スメリーの産科学がオランダ語を介して日本に入って来るまで更に待たねばならなかった。

二　吉益東洞と亀井南溟

大塚　敬節

日本の生んだ医家の中で、吉益東洞ほど賛否両論のはげしい論争をまき起こした人物はない。私はこの東洞の医風と治療に興味をもって、多年これの研究に従事しているが、また一方東洞を中心として論争を展開した人々の論議を分析してみると、これらの人々の立場や医風を考察する手がかりとなって、興味がある。

東洞にもっとも鋭い論評を加えた人に、亀井南溟がある。南溟は若くして東洞の門に入り、居ること数日にして、「英雄人を欺く」の捨てぜりふを残して東洞の門を去り永富独嘯庵の門人とな

り「古今斎いろは歌」「読医断」「読管豹俚言」「萬病一毒弁」などを著わして、東洞を論難している。

いま東洞と南溟との医説を比較検討してみるに、東洞が、医を学として体系づけようとの意図をもっていたのに対し、南溟は、医はあくまでも術であって、医の術は実地の修練をはげむことによって、その奥儀に達することができるとした。いうならば、この論争は、学と術との論議である。

現代にあっても、東洋医学界には、依然として、この学と術との論争がつづいている。私は、この学と術を止揚した新しい道こそ、わが東洋医学の今後の進路であると考えるものであり、この意味において、東洞と南溟との論議は生きた資料であり、単なる過去の物語りとは思わない。

十二月例会　（蘭学資料研究会と合同開催）十二月二〇日(土)
於慶応義塾大学北里記念図書館会議室

一　シーボルトの墓　　菊地　重郎

演者が去る九月ライデンで開かれた日蘭交渉史のシンポジウムの帰途、ミュンヘンにあるシーボルトの墓を訪ね、その模様を報告した。

シーボルトの墓はミュンヘン中央停車場から約2キロ南にある"Friedhof"あるいは"Südfriedhof", "Alter südlicher"と呼ばれている墓地にある。そこの33号地にシーボルトの墓がある。この墓地には日本になじみあるものとして、建築家クレンツエ（Leo von Klenze）の墓が29号地に、衛生学者ペッテンコオフェル（Max, von Pettenkofer）の墓もあった。墓地および、それぞれの墓の様子が写真の供覧でもって詳細に報告された。

（以上は蘭学資料研究会研究報告第二二九号に基づき編集委員が抄録した）

二　日本におけるヒポクラテスの画像と賛—その後の研究—　　緒方　富雄

第70回日本医史学会総会でこの問題について特別講演した後に諸氏より演者の下に寄せられた事項を検討、追加した結果の中間報告を行った。

まず、これまでの経過を総括的にスライドで説明した後、渡辺華山のヒポクラテス像の画かれた時期、出典につき現存するものを系列化し、それを補足する資料と合せて検討。次いで、坪井信道のヒポクラテス賛詩につき、更に自筆のものが3点、長与専斎筆が2点見つかり計12点となり、その決定的な辞句が判明した。また、神戸市立南蛮美術館所蔵のヒポクラテス像などが紹介された。

（以上は蘭学資料研究会研究報告第二二九号に基づき編集委員が抄録した）

日本医事新報社社長
日本医史学会理事　故梅沢彦太郎さんを悼む

梅沢さんは、日本医史学会の黎明期から昭和四十四年八月二十三日に他界される日まで、長いあいだ日本医史学会の理事として、医史学の発展に協力していただいた。

戦後は、ほとんどといってよいくらい、例会では顔を見ることはなかったが、「日本医事新報」には積極的に医史学関係の論述を取りあげていただいたおかげで、医史学の舞台は年と共に拡大してきた。

富士川游先生の時代に比較してその幅も広くなり、範囲も随分拡大されたわけで、このことを梅沢さんと話して感慨を新たにしたこともあった。

梅沢さんが「日本医事新報」に打ち込んだ精魂、新聞人としての卓越した姿勢には、私達も学ぶべき多くの点があった。また医界の趣味人を暖かく育て続けた功績も見逃がせない。いつしか趣味のなかの陶磁界、美術界に識見者として君臨した梅沢さんも忘れられない。名人芸に近い鑑識者の梅沢さんを失なったことはいちばん悲しいことである。

さらに医業界人事紹介の活躍、医療信用組合を作るなどで医療界の経済復興に寄与した功績も偉大であった。梅沢さんだからこそ出来たといえる事業である。

兎に角、梅沢さんの業績は数えきれないが、いつも強い信念を持って事に当たったことが、すべてを成功させたと私は思っている。

わが日本医史学会が賛助会員制を実現したときも、いちはやく賛助会員になって下さった。今春第七十回の総会を、蘭学史料研究会、歯学史集談会と合同で東京で開いたときも、私の希望をいれて梅沢記念館を会期中公開していただき、会員を喜こばせていただいた。

梅沢さんが日大病院に入院されて以来、物療科のマッサージを受けておられたが、担当の横前卓治君は、私の自宅のそばに住んでいる関係から、私も十年前から横前君の治療を受けているので、梅沢さんの病状の変遷は彼を通じて聞く機会が多かった。不治の病気と闘い続けた梅沢さんの根性の強さに、私は最大の敬意を表していた。

涙ぐましい努力の功もなく遂に逝去されたことは遺憾に耐えない。

最後に梅沢さんの略歴を掲げておこう。（今田見信記）

略　歴

本　籍　東京都新宿区矢来町三一番地
現住所　東京都新宿区矢来町六二番地

梅沢彦太郎
明治二六年五月二三日生

大正三年七月　東京慈恵会医学専門学校中退
同　年八月　千代田区神田三河町日本之医界社（社長土屋清三郎）へ入社
同　十年一月　日本之医界社退社
同年二月墨田区東両国に日本医事新報社創立
「日本医事新報」を発行
昭和二三年三月　労働大臣許可による営利職業紹介事業発足
同　二四年　日本陶磁協会理事長に就任
同　三十年六月　株式会社週刊日本医事新報社と社名を改め代表取締役に就任
昭和三三年六月　日本出版協会会長に就任
同　三五年五月　東京都医師信用組合理事長に就任
同　年六月　合資会社日本医事新報医療職員紹介所を設立し代表社員に就任
昭和三六年二月　文部省文化財保護委員会専門委員に就任
同　三八年九月　東日本医師協同組合常務理事に就任
同　四三年五月　梅沢記念館（日本医事新報社記念館）を設立し館長に就任
昭和四四年八月二三日　死亡

《「生物学史研究」購読者会員募集》

◇本誌の特色
・日本における生物学史研究の動向を知りうる。
・完成された論文とともに、これから熟さんとする研究も多く載せる。
・生物教育との関連で生物学史をとらえる方向での記事を取り上げる。

◇出版要項　年二回、タイプ印刷、平均五〇頁、既に一七号まで発行。
◇会　費　年額五〇〇円、本誌への投稿、発言ができる。
◇申込先　東京都目黒区大岡山　東京工業大学工学部　八杉研究室
江上生子気付　日本科学史学会生物学史分科会
振替口座　（東京）六五〇三〇
◇編　集　日本科学史学会生物学史分科会
◇研究会　会員でなくても自由参加を歓迎
日時　原則として毎月第三土曜日一七時三〇分から
場所　東京工業大学　八杉研究室（第三新館三〇九）
◇電　話　七二六―一一一一　内線二二五九

日本医史学雑誌第十五巻総目録

原著

栗崎道有伝補遺　大鳥蘭三郎　一—五
安懐堂をめぐる二、三の問題　片桐一男　六—八
安懐堂と日習堂　片桐一男　九—十一
烏山松円ははたして庄内藩医か　松木明知　十二—十五
山鳴大年にあてた洪庵と郁蔵の書簡　小田皓二　十六—二〇
華岡青洲と門人杉立以成　蒲原　宏　一三五—一四二
鷗外の史伝（渋江抽斎）の校勘記(Ⅱ)　松木　明　一四三—一四五
Samnel D. Gross について　小野　譲　一四六—一五八
河口信任と穏れキリシタン　川島恂二　一五九—一六三
肖像異変—山懸大貳か香川修徳か—　故若尾隣平　一六四—一七一
Abraham Lincoln's Family Doctors　E. F. Pearson　一八七—一九〇
福沢諭吉の「牛痘再種之説」　大滝紀雄　一九一—一九五
利光仙庵著「引痘夜話」について　川島恂二　一九六—二〇四
生きた歴史内分泌学者シーハン先生小伝　中江孝治　二〇五—二〇八
適塾門下生坪井信立に就て　青木一郎　二〇九—二一三
嶺春泰伝追加　緒方富雄　二一四—二一七
鷗外の史伝「渋江抽斎」の校勘記(Ⅲ)　松木　明　二一八—二二一
Detachments to the Isle of yezo and Scurvy.　Akira Matsuki　二三八—二四二

第70回日本医史学会総会（二号）

特別講演

著書調所について　沼田次郎　一—一〇
日本におけるヒポクラテスの画像と贄　緒方富雄　一一—一五
明治初期の日本歯学　山田平太　一六—一八
明治維新前後の医学—とくにお雇い外人について—　小川鼎三　一九—二四

一般講演

中天游訳〈引律〉について　吉田　忠　二五
安懐堂と日習堂　片桐一男　二五—二六
写本和蘭会話書（樫斎進印あるものおよび河東館・小関氏等の印のあるもの）について　佐藤良雄　二六—二七
江馬元益著「薬渠漫筆」をめぐって(Ⅱ)　末中哲夫　二七—二八
平井海蔵　安井　宏　二八—二九
Gomez の天球論と Clavius (Ⅱ)　今井　湊　二九—三〇
適塾門下生井上主水について　茅原　弘　三〇—三一
新元会員中の西哲像について　中野　操　三一—三六
宇田川玄真「小児諸病」、坪井信道「診候大概」、箕作阮甫　阿知波五郎　三六—三七
「斯微甸・発斑熱」について　神田　茂　三七—三八
司馬江漢の「天地理談」
杉田玄白先生解体図と記銘のある平次郎解剖図について　蒲原　宏　三九
ジョージ・ワシントンの義歯と当時の日本義歯　新藤恵久　三九—四〇
大槻玄沢著「西〇対晤」について　大鳥蘭三郎　四〇—四一
第一回・内国勧業博覧会における歯科と医科の出品について　鈴木　勝・谷津三雄　四一—四二

大阪の蘭学者橋本宗吉の年譜について　中野　操　四二
四世紀(古墳時代)代の洞穴遺跡より掘出された齲蝕歯牙について　瀬戸俊一・小出義治・高橋和人　四二―四三
明治初年京都医史資料として「京都府政治部衛生類」について　阿知波五郎　四三―四四
日本の義歯に関する医史学的研究　筒井正弘　四四―四五
切手で見る種痘の歴史　古川　明　四五―四六
蘭医ボードインの胎児解剖　松木明知　四六―四七
アイヌ医療政策史の研究　松木明知　四七―四九
放射線医家浦野多門治と装置製作者福田雋一・室馨造について　今市正義　四九
ロンドノウ著医事法規について　大矢全節　四九
「千金要方」に関する二、三の問題点　大塚恭男　五〇
西域医療の東漸史考　吉田一郎　五〇―五一
わが国における歯科診療報酬の変遷、とくに主要歯科診療行為間の報酬のバランスの変遷　高木圭二郎　五一―五二
栗崎家系譜および二代道喜等の書簡について　竹内真一　五二
備前藩主を診察した名医達　中山　沃　五二―五四
江戸時代における京都・大阪の歯科医について　杉本茂春　五四―五五
湊長安の「丹晴堂随口任筆」について　赤松金芳　五五
宇田川蘭方医学の問題点―秘められた諏話俊士徳と藤井方亭　藤井亭巳　五五―五六
足立長雋の訳著「女科集成」と「産科礎」　酒井シヅ　五六―五七
中川五郎治の系譜　松木明知　五七―五八
華岡青洲の麻酔剤の蘭学史上における位置　宗田　一　五八―五九
適塾門生と加賀藩　津田進三　五九―六〇
新発田にウイリスの跡を訪ねて　鮫島近二　六〇
クラスプを応用した木彫部分床義歯の一例　中沢　勇・平田幹男・佐藤　裕　六〇―六一
軍医総監森鷗外の業績―その試論1―　伊達一男　六一
幕末の生野銀山における煙毒とその対策　三浦豊彦　六一―六二
陸軍衛生材料廠で行なった民間医科器械の委託検査制度について　会田　恵　六二―六三
明治時代における日本歯学雑誌について　高麗日出男　六三―六四
公衆衛生面よりみた横浜医学史　杉田暉道　六四―六六
本邦医学教育制度史序説　長門谷洋治　六六―六七
十七―十九世紀日鮮麻疹流行史　流行周期則　三木　栄　六七
第七〇回日本医史学会総会展示品目録　六七―六九
学会記事
伊藤圭介翁の旭園趾碑除幕式について　吉川芳秋　二一―三〇
資料
明治・大正医師会史略　塩沢　香　三一―四七
例会記事
ポンペ来日直前の長崎の蘭学　大滝紀雄　四八
日本薬理学の誕生及びその後の展開　原　三郎　四八―四九
江戸期の中国系薬物書概観　吉田一郎　四九―五〇
(47頁下段に続く)

寺門静軒と安藤文沢　小川鼎三　一七二
小森桃塢の「蘭方枢機」とブカンの家庭医学（予報）　大鳥蘭三郎　一七二
古医書（写本）「口中療治俗書」、「小児方録」　小川鼎三　一七二―一七三
跡尋社長吉益四峰の業績について　矢数道明　一七三―一七四
福沢諭吉の種痘再種の説　大滝紀雄　二二一
利光仙庵著引痘夜話について　川島恂二　二二一
欧州ホメオパシー医薬の今昔　吉田一郎　二二一
歯科の古画と処方　広木彦吉　二二一
アンブロアズ・パレーについて　佐藤美実　二二一
日蘭交渉史に関するシンポジウムの成果　緒方富雄　二二一
解骨新書の付図とライデン大学教授ビドロー　小川鼎三　二二一―二二三
William Smellie とわが国の西洋産科との関係　酒井シズ　二二三
吉益東洞と亀井南溟　大塚敬節　二二三―二二四
シーボルトの墓　菊地重郎　二二四
日本におけるヒポクラテスの画像と賛―その後の研究―　緒方富雄　二二四
日本医史学会関西支部例会　五六―一七五
書評
ドナルドキーン著芳賀徹訳「日本人の西洋発見」　小川鼎三　五一―五二
万年甫訳編「神経学の源流1」を読んで　大鳥蘭三郎　五二
矢数道明著「明治百年漢方略史年表」　大塚恭男　五三
阿知波五郎著「ヘルマン・ブールハーヴェーその生涯、思想、そして蘭医学への影響」　長門谷洋治　一八〇―一八二
阿知波五郎著「ブルーハーヴェーその生涯、思想そして蘭医学への影響」　R・O　一八二
論文抄読
臨床家薬理学者としてのシドニーリンゲル　A・M　四七
Juan de Valverde de Amusso　T・O生　五四
The Concept of Barogue Mediciae in the Development of medical Historography　T・O生　五四―五五
The History and Traditional Treatment of Smallpox in Ethiopia　S・S　五五
Zur Geschichte der Pocken und Dockenimpfuny　S・S　五五―五六
ウイリアム・ジェームス不在の米国精神病学　T・O生　一七四
The White Veins : Conceptual difficulties in the Historg of the Lymphatics　S・S　一七七―一七八
Alexander Borodin, the Scientist, the musician, the Man　A・M　一七八―一七九
The History of the Electrical Activity of the Brain as a Method for Localizing Sensory Function　S・S　一七九
雑録
訃報　安西安周氏　五七

昭和四四年他読所載医史学関係論文目録

医学史研究　医学史研究会

31号（昭・44・2・20）

第6回東京研究集会特集

第6回東京研究集会の討論から　岡田靖雄

精神障害者をめぐる最近の動き　青柳精一

日本における医師不足と偏在

医療保険制度抜本改革試案と福祉国家　川上　武

医療労働者の実態と問題点　大山正夫

医学部紛争はなぜ長びくか　村松博雄

医学教育制度検討の背景　金沢　彰

職業病における労災補償制度の史的側面　細川　汀

〈鷗外と医学〉覚書その5

―別天氏によせて一九六八年あれこれ　丸山　博

日本で最初に医学生に検徴を示教したといわれる蘭人医師ポムペに就いて　荒瀬　進

愛の種痘医（一〇）　浦上五六

32号（昭・44・6・30）

日医学教育史―西欧医学学教育の勃興　John Z. Bowers

江戸時代の衛生検査―黒川良安の水質吟味　谷島清郎

インターン闘争小史　多田羅浩三

須田朱八須郎君と民医連運動

中浜東一郎日記について　丸山　博

稲目瘡（いなめがさ・麻疹）の語源　三井駿一

来日外人医学関係者名簿　中川米造・長門谷洋治

33号（昭・44・11・20）

医学史研究会第9回総会講演報告要旨

「要望課題」一九六〇年代における保健・医療

一九六〇年代産業「合理化」下の労災職業病とわが国の労働安全衛生　細川　汀

呼吸器病最近の動向　小松良夫

発表論文からみた精神医学の一〇年　松田方一

一九六〇年代の薬物療法―特に向精神薬について―　宗田　一

一九六〇年代の看護技術の推移―主としてチーム・ナーシング導入をめぐって―　木下安子

総会メモ

一九六〇年代の保健・医療関連略年表

「一般講演」

技術思想の変遷医療危機と技術思想　林　正秀

粉塵環境の変遷　三浦豊彦

近代保健の思想的前提　汲田克夫

明治政村と看護婦養成―日赤を中心に―　長門谷洋治

異形式抜歯鉗子の歯学史的研究　杉本茂春

医学通信　東京・医学通信社・神田

写真ことはじめ　吉川芳秋　九五三号（昭44・7・2）

湯浅四部翁から恵贈された本草資料など　吉川芳秋　九六三号（昭・44・10・15）

名古屋の医家鈴木重文の伝　吉川芳秋　九六六号（昭・44・11・19）

医学のあゆみ　医歯薬出版株式会社

労働科学の50年とその展望　三浦豊彦　第68巻　第2号（昭・44・1・11）

ヒポクラテス　緒方富雄　第68巻・第7号（昭・44・2・15）

古典ギリシャにおける生化学思想—ギリシャ本土とその周辺　木村雄吉　第69巻第1号（昭・44・4・5）第71巻第2号（昭・44・10・11）第71巻第4号（昭・44・10・25）第71巻第7号（昭・44・11・15）

Gastroscopy の父 Rudolph Schindler の死によせて　崎田階夫　第69巻・第5号（昭・44・5・3）

三つのヒポクラテス画像の出あい　緒方富雄　第69巻　第10号（昭・44・6・7）

一八六二年ライデン大学総長に贈星された緒方洪庵訳「扶氏経験遺訓」　緒方富雄　第71巻第11号（昭・44・12・13）

古代エジプト医学　大塚恭男　第70巻第10号（昭・44・9・6）

日本の形成外科のあゆみ　鬼塚卓弥　第71巻第13号（昭・44・12・27）

医譚　日本医史学会関西支部

復刊第39号（昭・44・6・1）

日本に於ける肝吸虫の発見と石坂堅壮　森下　薫

Kaempfer の「廻国奇観」と Boerhaave について　阿知波五郎

御製本草品彙精要について　岡西為人

大井家先祖系譜考　付諷誦歎読　岩治勇一

読書余瀝(1)大阪除癌逸聞

(2)広瀬旭荘の種癌詩

復刊第40号（昭・44・12・1）

ブルーハーヴェ生誕三〇〇年記念特集

Herman Boerhaave 生誕三百年記念特集号のはじめに　阿知波五郎

新宮涼庭の内科則について　中山　沃

「蒲爾華歇・万病治準」と坪井信道　津田進三

小森桃塢の「蘭方枢械」と W. Buchan の "Huislijke Geneeskunde"（序章）　大鳥蘭三郎

ゲーテをめぐる医師達—ゲーテがブールハーヴェに傾倒した理由についての一考察　藤森速水

ブールハーヴェの "Simplex Veri Sigillum" について　三木栄

からだの科学　日本評論社

ウィルヒョウ　大塚　恭男　二五号（昭・44・1・15）

パスツール　杉田　暉道　二六号（昭・44・3・15）

ヘボン　長門谷洋治　二七号（昭・44・5・15）

コッホ　石山　昱夫　二八号（昭・44・7・15）

クレッチャー　飯田　真　二九号（昭・44・9・15）

ブールハヴェ　阿知波五郎　三十号（昭・44・11・15）

漢方の臨床　第十六巻　東亜医学協会

同誌第一～一五巻・巻号別・著者別索引　一二・号合併号（全巻）

漢方医学全書について(1)～(8)　岡西為人　四号（昭44・4・25）五号（昭44・5・25）、六号（昭44・6・25）、七号（昭44・7・25）、八号（昭44・8・25）、九号（昭44・9・25）、十号（昭44・10・25）、十一号（昭44・11・25）

香月牛山寿塔をめぐって　宮崎綾子　四号（昭44・4・25）
京都跡寿社長吉益鉄太郎伝　矢数道明　七号（昭44・7・25）
「三帰廻翁医書」について　矢数道明　八号（昭44・8・25）
北総の名医石原吾道伝　矢数道明　九号（昭44・8・25）
「日本医学史」曲直瀬道三伝中の細川勝元の誤りについて　矢数道明　十号（昭44・10・25）

自然　中央論社

実地臨床医学教育の起源　阿知波五郎　第24巻4号（昭44・4・1）
新しい医学教育の誕生　阿知波五郎　第24巻5号（昭44・5・1）
医学教育用語の近代化　阿知波五郎　第24巻6号（昭44・6・1）
近代大学への脱皮　阿知波五郎　第24巻7号（昭44・7・1）
ロマン医学から精密科学医学へ　阿知波五郎　第24巻8号（昭・44・8・1）
アメリカ医学教育史　阿知波五郎　第24巻9号（昭44・9・1）
第24巻10号（昭・44・10・1）　第24巻11号（昭44・11・1）
イギリス医学教育史　阿知波五郎　第24巻12号（昭・44・12・1）
クッシングとのめぐりあい　中田瑞穂　第24巻9号（昭・44・9・1）
シュペーマンと現在の生物学　山田常雄　第24巻12号（昭・44・12・1）
マックス・プランク協会　佐野　勇　第24巻12号（昭・44・12・1）

日本医事新報　日本医事新報社

「陸軍生制度史」と鷗外の歴史小説をめぐって　伊達一男　二三三九号（昭・44・2・22）、二三四〇号（昭・44・3・1）
ポンペと我国最初の洋式病院　大滝紀雄　二三四二号（昭・44・3・15）二三四三号（昭・44・3・22）
台湾医学創立時の回想　小田俊郎　二三四五号（昭44・4・5）
渡辺華山と「遊相日記」林　豁　二三四六号（昭44・4・12）
将軍家光は馬鹿殿様か名君か　王丸　勇　二三四七号（昭・44・4・19）二三四八号（昭・44・4・26）
続・川柳より見たる明治時代の医療・衛生（医術篇）山本成之助　二三五二号（昭・44・5・24）二三五三号（昭・44・5・31）
二三五四号（昭・44・6・7）
続・川柳より見たる明治時代の医療・衛生（衛生篇）山本成之助　二三五五号（昭・44・6・14）二三五七号（昭・44・6・28）
二三五八号（昭・44・7・5）二三五九号（昭・44・7・12）
医史学会見聞記　蒲原　宏　二三五六号（昭・44・6・21）
順正書院　大滝紀雄　二三五六号（昭44・6・21）
軍医総監森鷗外の業績　伊達一男　二三五九号（昭44・8・12）
中世紀の医科大学　田村幸雄　二三六六号（昭44・8・30）
二三六七号（昭・44・9・6）
「日本医学史」曲直瀬道三伝中の誤りについて　矢数道明　二三六七号（昭・44・9・6）
坪井誠軒の死　青木一郎　二三六七号（昭・44・9・6）
居眼り病に罹った珠光と雪蓬　王丸　勇　二三六九号

（昭・44・9・20）
続・川柳より見たる明治時代の医療・衛生（薬剤篇）山本成之助
二三七〇号（昭44・9・27）二三七二号（昭・44・10・25）
二三七四号（昭・44・10・25）二三七五号（昭・44・11・1）
億川家蔵本「扶氏医戒之略」複製刊行にあたって　藤野恒三郎
二三七三号（昭・44・10・18）
鷗外の広告　伊達一男　二三七二号（昭・44・10・11）
徳川家光　朝比奈泰雄　二三七二号（昭・44・10・11）
アザフの誓い―ヘブライの医学倫理―　松木明知　二三七五号
（昭・44・11・1）
続・川柳より見たる明治時代の医療・衛生（追加）山本成之助
二三七六号（昭・44・11・8）二三七七号（昭・44・11・15）
坪井信道の日習堂創立について　中野　操　二三七八号
（昭・44・11・22）
松江藩の名医久城春台の墓　米田正治　二三七八号
（昭・44・11・22）
父の日記（一眼科医の記録）　稲田　務　二三七六号（昭・44・11・8）、二三七七号（昭44・11・15）、二三七八号（昭・44・11・22）二三七九号（昭・44・11・29）二三八〇号（昭・44・12・6）二三八一号（昭・44・12・13）二三八二号（昭・44・12・20）
北越眼科研究会記事　三国政吉　二三七七号（昭・44・11・15）
二三七九号（昭・44・11・29）
ソ連における東洋医学の研究情況について　矢数道明　二三八二号（昭・44・12・20）
青年医人橋本左内　後藤三郎　二三八二号（昭・44・12・20）

日本医事新報　ジュニア版　日本医事新報社
近世医学史から　大鳥蘭三郎　七九号（昭・44・1・15）、八〇号（昭・44・2・15）、八一号（昭・44・4・15）、八二号（昭・44・1・15）、八三号（昭・44・6・15）、八四号（昭・44・7・15）、八五号（昭・44・9・15）、八六号（昭・44・10・15）、八七号（昭・44・11・15）、八八号（昭・44・12・15）

日本東洋医学会誌　日本東洋医学会
日本東洋医学会十年史　19巻4号（昭44・3・30）
日本東洋医学会二十年史　19巻4号（昭44・3・30）
明治以降漢洋両医学の対立と交流の変遷について　矢数道明
20巻2号（昭44・10・30）
素問霊枢に示された肝の生理について　柴崎保三
20巻2号（昭・44・10・30）

ミノファーゲン・メヂカル・レビュー　十四巻
チベットの医学―ラヤの医学―　芳村修基、芳村ヤサヱ
一号（昭・44・1・10）
随唐の医学　大塚恭男　二号（昭・44・12・10）
南蠻医学からオランダ医学へ(1)　大鳥蘭三郎　四号
（昭・44・4・10）
南蛮医学からオランダ医学へ(2)　大鳥蘭三郎　五号
（昭・44・5・10）

メジカルニュース　大日本製薬株式会社
古代エジプトの遺品　小川鼎三　96号（昭・44・5・20）
ヒポクラテス　小川鼎三　97号（昭・44・6・20）
ポンペイで発掘された外科器械　小川鼎三　98号

アンドロマコス創製のテリアカ　小川鼎三　99号（昭・44・7・20）
（昭・44・8・20）
ローマの医師　小川鼎三　100号（昭・44・9・20）
アラビア医学　小川鼎三　101号（昭・44・10・20）　102号（昭・44・11・20）
エウスタキオの解剖書　小川鼎三　103号（昭・44・12・20）

労働衛生　中央労災害防止協会

明治初年の外人産業医　三浦豊彦　10巻1号（昭・44・1・1）
砂鉄　三浦豊彦　10巻2号（昭・44・2・1）
桐原葆見と労働科学　三浦豊彦　10巻3号（昭・44・3・1）
生野銀山煙毒小史　三浦豊彦　10巻4号（昭・44・4・1）
デ・レ・メタリカ　三浦豊彦　10巻5号（昭・44・5・1）
金堀病体書の筆者荒谷忠兵衛は山主である　三浦豊彦　10巻6号（昭・44・6・1）
安全衛生ポスター　三浦豊彦　10巻7号（昭・44・7・1）
ラマッチニと工芸家の病気　三浦豊彦　10巻8号（昭・44・8・1）
日本最初の鉱夫共済組合病院　三浦豊彦　10巻9号（昭・44・9・1）
禁煙史話　三浦豊彦　10巻10号（昭・44・10・1）
扶氏長生法・幕末の西洋衛生書　三浦豊彦　10巻11号（昭・44・11・1）
天保の飢饉と鴨の騒立　三浦豊彦　10巻12号（昭・44・12・1）

蘭学資料研究会研究報告　蘭学資料研究会

日本におけるポンペ・ファン・メールデルフォールト　沼田次郎　第二一八号（昭・44・1・18）
麻田剛主の二・三の問題点について　渡辺敏夫　第二一九号（昭・44・2・15）
蘭学事始研究その後（展望）　緒方富雄　第二二〇号（昭・44・3・15）
蘭医画家 Jan Froderik Feilke（一七八〇―一八一四）について　遠藤　毅　第二二〇号（昭・44・3・15）
阿片と津軽一粒金円―日本における罌粟栽培の歴史に関連して―　松木明知　第二二〇号（昭・44・3・15）
秋田の蘭画家小田野直武の系譜―「蘭東事始」覚之書　其五―　松本明知　第二二一号（昭・44・4・19）
日蘭交渉史に関するシンポジウム　緒方富雄ほか参加者　第二二七号（昭・44・10・18）
シーボルトの墓　菊地重郎　第二二九号（昭・44・12・20）
日本おけるヒポクラテスの画像と贄―その後の研究―　緒方富雄（昭・44・12・20）

薬史学雑誌　**四巻一号**　（昭・44・8・25）

日米両国における薬業経済史比較論　吉田　甚吉
薬業史考察への道　高橋真太郎
薬史学の課題　川瀬　清
薬史学の今日的意義　小瀬　洋喜

日本医史学会々則

第一条　本会は日本医史学会と称する。

第二条　本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条　本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかつ。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展観などを行なう。

四、日本の医史学を代表して内外関係学術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条　本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条　会員は会費として年額一五〇〇円を前納する。ただし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条　本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は

会員より理事長が任命する。

六、役員の任期は二年とし重任を妨げない。（ただし会長を除く）

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条　評議員は若干名とし、普通会員の中より理事会の推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八条　本会の事務所は順天堂大学医学部医史学教授室内（東京都文京区本郷二の一）に置く。

第九条　本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第十条　会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日　年四回（一月、四月、七月、十月末日）とする。締切は発行月の二か月前とする

投稿資格　原則として本会々員に限る。

原稿形式　原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著者名のつぎに英文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに英文抄録を添えること。原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

原稿枚数　表題、著者名、本文（表、図版等を除く）で三印刷ページ（四百字原稿用紙で大体七枚）までは無料とし、それを越えた分は一印刷ページあたり一五〇〇円を著者の負担とする。

校　正　原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別　刷　投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先　東京都文京区本郷二丁目一の一　順天堂大学医学部医史学教授室内　日本医史学会

編集委員　大鳥蘭三郎（委員長）　石原明　杉田暉道　大塚恭男　酒井シヅ

日本医史学会役員氏名（五十音順）

理事長　小川　鼎三
会　長　鈴木　宜民
常任理事　石原　明　大鳥蘭三郎
理　事
赤松　金芳　阿知波五郎　今田　見信
石川　光昭　内山　孝一　大久保利謙
大塚　敬節　大矢　全節　緒方　富雄
岡西　為人　蒲原　宏　佐藤　美実
杉　靖三郎　鈴木　正夫　鈴木　勝
宗田　一　竹内　薫兵　津崎　孝道
戸苅近太郎　中野　操　三木　栄
矢数　道明　吉岡　博人　和田　正系
福島　義一　藤野恒三郎　丸山　博
松木　明知　三浦　豊彦　三廻　俊一
森　優　谷津　三雄　山形　敞一
山下　喜明　山田　平太
幹　事
大塚　恭男　酒井　シヅ　杉田　暉道
谷津　三雄

日本医史学会評議員氏名（五十音順）

安芸　基雄　石田　憲吾　今市　正義
岩治　勇一　王丸　勇　大塚　恭男
金城清松　久志本常孝　榊原悠紀田郎
清水藤太郎　杉田　暉道　鈴木　宜民
高木圭二郎　高山　担三　田中　助一
津田　進三　中泉　行正　中沢　修
中山　沃　長門谷洋治　服部　敏良

「日本医史学雑誌」のバックナンバーについて

日本医史学雑誌五巻一号（復刊一号）―昭和二九年―から十四巻四号―昭和四三年―までのバックナンバー揃いを一万五千円一巻を千五百円、一号を四百円の会員価格で頒布しています。御希望の方は日本医史学会事務所宛に申込み下さい。

訃報

本会々員の藤井亭巳（本名　巳之吉）氏はかねて病気御療養中のところ去る十二月九日脳出血のため逝去されました。氏は藤井方亭の末孫であられ、藤井方亭の研究に精魂を傾け、多くの史実を明らかにされた。昭和44年度第70回日本医史学会総会では「宇田川蘭方医学の問題点　秘められた諏訪俊士徳と藤井方亭」と題して、医範提綱の題言を書き、宇田川榛斎の訳述を筆記した諏訪俊士徳が藤井方亭であると主張された。この研究が更に発展することが望まれていただけに一層、藤井氏の死が惜しまれる。謹しんで御冥福を祈ります。

（83頁より続く）

インドにアユール・ヴェーダを訪ねて　石原　明　五〇―五一
訃報　平塚俊亮氏　二号　七二
鮫島近二氏　一七六―一七七
故梅沢彦太郎さんを悼む　二二五―二二六
故藤井亭巳氏　二二七
国際医史学会総会開催について　一八五
日本医史学会々則　五七―五八、二号・七〇―七一、一八三―一八四
「日本医史学雑誌」投稿規定　五八、二号・七一、一八四

昭和四十四年十二月二十五日　印刷
昭和四十四年十二月　三十日　発行
日本医史学雑誌　第十五巻　第四号
編集者代表　大鳥蘭三郎
発行者　日本医史学会　代表　小川鼎三
印刷者　柏原義治
発行所　日本医史学会
東京都文京区本郷一ノ一ノ一
順天堂大学医学部医史学教室内
郵便番号一一三番
振替東京一五二五〇番

(8)

Dr. Umetaro Suzuki (1373–1843), famous for the discovery of oryzanin (Vitamin B), wrote in his book "Vitamin" that typical scurvy seems to have scarcely occured among the Japanese who have eaten vegetables and fruits from the remotest days. Therefore, the notion of scurvy might be introduced into Japan in the Meiji era."

In fact, it is as stated above that around 1800, many soldiers of the north-eastern clans who had been dispatched to the isle of Yezo died of his disease without fighting in camps.

translation to copy and tried to present it to a colleague accampanying the northern guard."

This is followed by symptoms and methods of the treatment. It is remarkable that oranges such as lemon etc. were recommended in these chapters.

The shogunate government at Edo seemed to have adopted this recommendation, and gave in 1838 two glasses of lemon juice, tens of lemons and oranges, and a little herb as a preventive agent against scurvy to the Russian captain Vassilii Mikhailovich Golovnin (1776-1381) who had been imprisoned at Hakodate.

(6)

The Tsugaru clan started out to devise a countermove in 1805 when many people died of the disease. The countermeasures, however, were not radical and were only temporizing because the "swelling disease" was quite strange. These facts can be presumed by a sentence of the bissextile June in 1808 tellng as follows ; "It is quite confused that most of officials who had been dispatched to the isle of Yezo died. Some who had survived winter, tried to locate dwelling at suitable places, removing or cutting moist bushes. After all, however, they could not avoid suffering from the disease".

The soldiers of the Nanbu clan, as those of the Tsugaru clan, drunk juices of skunk cabbages or Sarunashi and pricked purpura with a needle to defend coagulation. As stated above, however, only a few persons seem to have known that fresh vegetables were excellently effective for the disease.

(7)

From the Kaei, and Ansei period (1848-1860), i. e. nearly the last days of the Tokugawa government, the supply of materials and other conditions took a turn for the better and the Hakodate magistrate's office supplied the wintering soldiers with the import coffee to prevent scurvy. Just from those days, scurvy occured scarcely. In spite of these conditions, a few occurrences were reported in "To-Kai-Yawa" written by a physician Yoan Ouchi serving at the Hakodate magistrate's office.

was because they had never suffered from the disease" and then symptoms were roughly reported as follows ; a slight fever and then swelling of the lower limbs with arthralgia. Some patients, furthermore, have purpura in the mouth and limbs. Day by day, edema occurs at the lower half of the body, and palpitation becomes so strong that dyspnea may happen. The certain symptoms of this disease are purple-black spots of the trunk or the lower half of the body and easily bleeding gingiva only to become ulcer. If symptoms above mentioned occur from the year end to spring, a wonderful effective agent should be given to alleviate fever at first and then "Saikaku-Gedoku-Tan (a counterpoison with rhinoceros' horn.)"

"Saikaku-Gedoku Tan" was manufactured by Aikando company at Edo and sold exclusively by Kahei Takadaya (1767-1827), famous for exploitation of the Itrup island.

This disease is correctly assumed scurvy due to lack of Vitamin C judging from symptoms and processes, and from the time of attack above mentioned, and it was clearly approved by Gentaku Otsuki (1757-1827) in his book "Kanchi-byoan" (Considerations on Diseases in Yezo). "Seitai-Gakan" is the Chinese medical name of scurvy. "Seitai" means Purpura in the lower part of the body and "Gakan" does gingival ulcer.

(5)

At the first dispatch of troops to the isle of Yezo by the Sendai clan in 1808, Gentaku Otsuki wrote "Kanchi-byoan" under the clan order to provide doctors accompanying a detachment. In this way, the Sendai clan tried to check the damage of "swelling disease" to the minimum.

"Kanchi-byoan" was really translated from the chapter scurvy of the textbook of internal medicine whitten by Lorenz Heister by a certain disciple of Gentaku, perhaps Genshin Udagawa (1767-1832).

At the beginning part of prologue, Otsuki described as follows ; "Someone who stayed at the deep isle of Yezo during winter, suffered from the disease. Last year, a sailor told that he had seen at Nemuro, three persons had suffered from the disease which was "Seitai-Gakan" of Irinshuyo and Isokinkan (Chinese old medical books). When they tried to counter attack Russians, they suffered from the disease. A certain disciple translated the part of the treatment from a Holland medical book. I borrowed this

Anyhow, it is a dreadful fact that in less than 10 years after 1850, more than some hundreds of soldiers died of the strange disease at the northern lands.

(3)

This strange disease was then called "Fushubyo (edema)" or "Hareyamai (swelling disease)" at the isle of Yezo, the Tsugaru and Nanbu district and conveyed far away to Edo causing the significant problem. Regarding the climate of severe cold and the moist land as the cause of the strange disease, each clan made every possible effort to improve the equipments of the camps and outputs for protection against cold. It shows a good example that in 1800 the Tsugaru clan performed urgent dog hunting and supplied 800 sheets of dog's leathers to the detachment to the isle of Yezo.

An explorer Tokunai Mogami did not think of the climate of severe cold but "Kadoku (fire poison)" resulting from charcoal fire as the cause, and investigated the soldiers of the Tsugaru clan in vain. On the other hand, Hanzo Yamazaki etc. who had gone to and from the isle of Yezo several times realized from the experiences that fresh vegetables were effective for preventing the disease and reported in his diary "Twenty raw radishes were presented for the treament of swelling disease. They were excellently effective, and set the same value as ginseng".

It is, however, quite uncertain what disease it was because detailed descriptions on the disease were wanting. In "Japanese History of Medicine", "Japanese history of Diseases", Dr. Fujikawa does not refer to the disease at all.

(4)

Nampo Ota (1779–1823), famous for comic tankas and poems, published a book called "Kanasogi" in which this disease was mentioned very much to the purpose at the part of drugs, "Seitai-Gakan-Ryoyaku ; Saikaku-Gedoku-Tan (effective counter-poison with rhinoceros' horn for Seitai-Gakan.)

At first it is written as follows ; " The strange disease called Seitai-Gakan occured at the deep isle of Yezo. They suffered from disease not from spring to winter, but from the year end to spring. Why did the disease occur among those who had wintered at the deep isle of Yezo? In our country many people and doctors could not realize what the disease

Detachments to the Isle of Yezo and Scurvy

Akitomo Matsuki. M. D.*

(1)

Since 1778 when a Russian ship made the first visit to the isle of Yezo (today's Hokkaido) in quest of trade with our country, negotiations between Japan and Russia became frequent and grew strained gradually. In response to this situation, the shogunate government at Edo (today's Tokyo) dispatched Tetsugoro Yamaguchi, Tokunai Mogami (1754–1836) to the isle of Yezo to investigate actual circumstances in 1758, Juzo Kondo (1771–1829) to Kunashiri and Itrup island in 1789, and Rinzo Mamiya (1775–1844), famous for the strait of Mamiya, to Sakhalin to explore the northern lands in 1803.

In 1804, the shogunate government at Edo issued the "permanent defence law" and ordered the Matsumae clan to guard the isle of Yezo from the Russian invasion. The weak and small Matsumae clan, however, could not fulfill this duty. Therefore, the shogunate government at Edo ordered the Tsugaru, and Nanbu clans, geographically near the isle of Yezo to support the Matsumae clan. In reply to the order, the two clans dispatched about 50 members of winter force to Itrup island.

Until the next spring, however, most of the soldiers died of a strange disease and only 7 soldiers survived. This event happened almost 160 years ago.

(2)

The strange disease caused the death of not only the soldiers of the Tsugaru, and Nanbu clan but also those of the Sendai, and Aizu clan etc. who wintered to guard so called the deep isles of Yezo (Sakhalin, Kuril islands etc.) for ten years after then. Gensuke Murabayashi reported in his diary "Genshi Fudo Manpitsu Nenpyo" that in 1808 the soldiers who died without fighting in camps amounted to no less than 200, and Hanzo Yamazaki of the Tsugaru clan who had wintered at the Soya district in 1808 wrote in his diary that not a few native ainos died of this strange disease.

* Department of Anesthesiology, University of Hirosaki, School of Medicine, Aomori, Japan

各科領域で
汎用される

C.H. ベーリンガーゾーン社製品

鎮痙剤、胃・十二指腸潰瘍治療剤	ブスコパン®
鎮痙・鎮痛剤	複合ブスコパン®
高血圧治療剤	カンヒドニウムR-S®
利尿降圧剤	バルミラン®
冠循環増強剤	ペルサンチン®
冠循環増強・鎮静剤	セダペルサンチン®
循環増強剤	エホチール®
脳・末梢循環障害治療剤	バスクラート®
喘息治療・気管支拡張剤	アロテック®
気道粘液溶解剤	ビソルボン®
緩下剤	ラキソナリン®
痔疾治療剤	ルブリテックス®
外用充血剤	ヒナルゴン

日本C.H.ベーリンガーゾーン株式会社
大阪市東区伏見町5丁目30番地（阪和ビル内）

販売元 田辺製薬株式会社
大阪市東区道修町3丁目21番地　支店 東京・福岡・札幌・名古屋

A 5 4311

110,000医家の週刊医学雑誌

最も親切なる臨牀医家の好伴侶

毎週土曜日発行

B5判 二百余頁
定価一部 一一二円
三ケ月分 一、六〇〇円
六ケ月分 三、二〇〇円
〔送料十八円〕
〔送料共〕

週刊

日本医事新報

清新潑剌・充実無比

——新らしき医学の動向を知るために——

「学説」「学会印象記」「カラー・グラビア」「MEDICAL・ESSAY」「時論」「ニューズ」「学会案内」「学位授与」「一週一話」「私の考え方」「質疑応答」「閑窓夜話」「お茶水だより」「人」「医事案内」其の他

——医家必読の有益記事全誌面に満載——

東京都千代田区神田駿河台2の9
電話 東京(292)1551(大代表) 振替東京25171番

日本医事新報社

朝夕一杯！　中将湯が

貴方の健康をととのえます

婦人良薬

中将湯

頭痛・肩こり・冷え
生理痛・生理不順
めまい・産前産後
更年期障害に

150円・300円

17種の薬草を一錠に

中将湯の錠剤

ラムール

200円・500円・1000円

TSUMURA

株式会社津村順天堂
東京都中央区日本橋通３～８

診断と治療社の四大臨床雑誌

診断と治療

臨床家，医学研究者必読の綜合臨床誌．毎号特集に重点をおき，臨床講義，目でみるページ，国際治療談話会，臨床例，臨床研究等盛沢山…
日進月歩の医学を知る好伴侶．毎月毎月自然血となり肉となる絶好の綜合臨床誌．

予約購読料　半年 2100　1年 4200

産科と婦人科

30有余年の歴史をもつ産科と婦人科の臨床誌．特集号は申すまでもなく綜説，臨床研究，他科との接点，ダイジェスト，Slide Conference，症例，薬剤の臨床等多忙な日常の先生もこれだけは是非目を通して頂きたいものばかり．

予約購読料　半年 2100　1年 4200

小児科診療

特集，診療と研究，海外小児科展望，学会抄録等小児科医が日常診療に従事する上に必要な診断治療のすべての問題を余すところなく提供，本書によって良心的な小児科診療を!!

予約購読料　半年 2100　1年 4200

外科診療

外科の核心は手術である．毎号特集に焦点を合わせ Clinical Conference 他，多くの写真，図をもって解説してあり，外科，整形外科，泌尿器科医必携の外科臨床誌．勿論すべてアート紙使用．

予約購読料　半年 2100　1年 4200

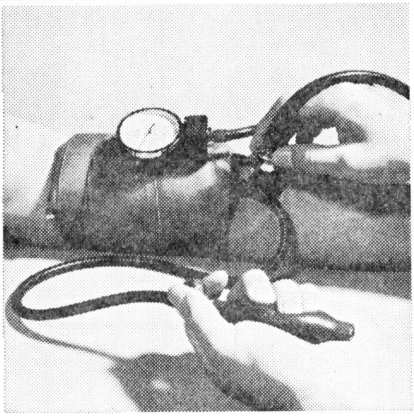
脳と発達

小児神経学・発達医学および関連領域に関するすぐれた綜説・原著論文の他，この領域の展望・速報・紹介記事などを掲載．
毎年　4，7，10，1月発行　編集　日本小児神経学研究会

予約購読料　半年 1000　1年 2000

㈱診断と治療社／東京都千代田区丸ノ内丸ビル4階406区
TEL(214)4957(代表)・振替東京 30203

〈健保適用〉



随伴症状の改善が迅速です

★新しいレセルピリン系の血圧安定・降下剤

パラテンシオール®

〈塩酸レセルピリン酸ジメチルアミノエチル〉

●降圧作用は緩和です

過度に降下させることなく、動揺性の高血圧に対し安定化作用を示し

●抑うつ症状を起こしません

老令者・管理職・インテリ層に特に好適です

●忍容性は良好です

脳・腎・心・肝・内分泌系障害や糖尿・痛風のある時にも広く用いられ

●随伴症状の改善が迅速です

頭痛・頭重感・肩こり・息切れ・耳鳴・めまいなど高血圧に随伴する愁
速やかに改善します

《用法》

作用が緩和ですので、降圧効果を比較的早く望まれる場合には、他の適
降圧剤との併用で治療を開始します。一定の降圧効果が得られた後は、
に本剤の単独維持療法にきりかえれば、不快な副作用発生の心配なく好
外来療法が可能です

《包装》糖衣錠(7.5mg):120錠(6錠×20) 600錠(6錠×100) 1500錠(6錠×

薬価基準—糖衣錠(7.5mg) 1錠当り25.60

製造＝吉富製薬〈大阪市東区平野町3－35〉
販売＝武田薬品　提携＝Latēma社〈フランス〉

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History

Vol. 15. No.4 Dec. 1969

CONTENTS

Original Articles

Revaccination Theory against Smallpox Translated by Yukichi Fukuzawa ····· Toshio Otaki···(1)

On Toshimitsu Senan's "Into Yawa"—Introduction to the Vaccination— ····· Junji Kawashima···(6)

A Short Biography of H. L. Sheehan and the Outline of Sheehan's Syndrome ····· Koji Nakae···(15)

On S. Tuboi,a Pupil of Ogata's Dutch Learning School ····· Ichiro Aoki···(19)

Additional Remarks on Biography of Shuntai Mine ····· Tomio Ogata···(24)

A Note on Ogai's "Chusai Shibue" (3) ····· Akira Matsuki···(28)

Detachments to the Isle of Yezo and Scurvy ····· Akitomo Matsuki···(i)

Notes from monthly meetings ····· ···(31)

Miscellaneous ·····(35)

The Japanese Society of Medical History
c/o Department of Medical History
Juntendo University, School of Medicine
Hongo 2~1, Bunkyo-ku, Tokyo